（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第69輯

脇浜遺跡Ⅲ

都市計画道路貝塚中央線建設に伴う発掘調査報告書

1991

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会

（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第69輯

脇浜遺跡Ⅲ

わきはま

都市計画道路貝塚中央線建設に伴う発掘調査報告書

1991

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会

調査区全景（南東から）

調査区全景（南から）

序　　文

ここに報告いたします貝塚市脇浜遺跡は、かって白砂の広がる海岸地帯でした。本地点の南西に注ぐ近木川の対岸にある二色の浜は、大阪府下北限の海水浴場として夏場には多くの浴客が訪れているところです。関西国際空港の建設にともなう整備計画の一貫としてこの地に湾岸高速道路や都市計画道路の大型交通網の計画が実施されることになって、脇浜遺跡の周辺も日々その姿を変えつつあり、昭和60年度に当協会で発掘調査を始めた頃には、まだ海を見ることのできた遺跡地も、今では遙か沖合いまで埋め立てられて、ほんの数年前までの海辺の姿の名残をとどめるものは、わずかに残る松林ぐらいのものです。

当協会で行いました脇浜遺跡の発掘調査は、ここに報告するものを含めて７次にわたっております。過去４次にわたる調査では古墳時代の海辺の遺跡を物語る製塩土器や、蛸壺などが大量に発掘され、その詳細はすでに「脇浜遺跡Ⅰ・Ⅱ」として報告して参りました。今回の調査は都市計画道路貝塚中央線建設にともなう墓地移転、取り付け道路の整備などの関連事業に先だって行われた調査が中心になっております。墓地移転先の調査では古墳時代後期の砂丘の上に作られた竪穴住居が発掘されたほか、平安時代のはじめに作られた皇朝一二銭の一つ貞觀永寶が見つかるなど、海岸部に営まれた脇浜遺跡のもう一つの素顔が明らかにされました。今回の調査成果がこの地域の歴史の解明の一助になれば幸いです。

本調査を実施するにあたり、大阪府土木部岸和田土木事務所、大阪府教育委員会、岸和田市教育委員会、その他地元関係者各位の多大のご協力、ご支援をいただいたことに深く謝意を表します。

今後も本協会の調査事業にご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成３年３月

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会
理事長　　仁賀奈　祐　吉

例　　言

1．本書は、都市計画道路貝塚中央線建設に関連して行われた脇浜墓地の移転地区の調査（1987年度実施）と、道路予定地内で行われた過年度の調査の残地部分の調査（1990年度実施）及び、本線への取り付け道路部分の拡幅改修工事に関連して行われた市道部分の調査（1990年度実施）の三次にわたる調査の成果をまとめたものである。

2．調査は、大阪府土木部岸和田工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもとに、当協会が実施した。

3．1987年度調査については、当協会調査課第４班　山上雅弘、岡本圭司が担当し、1988年１月28日に開始、同年３月25日に終了した。1990年度本線内調査（以下1990年度第１次調査）は同調査課第２班　木下　亘が担当し、1990年７月30日に開始し、同年９月６日に終了した。市道取り付け部分の調査（以下1990年度第２次調査）は同調査課第２班　虎間英喜が担当し、1990年12月18日に開始し、1991年２月20日に終了した。

4．調査の実施にあたっては、大阪府土木部岸和田土木事務所、貝塚市教育委員会及び地元関係各位の協力を得た。

5．本書の執筆は、各調査担当者が行い、資料班が統括的な編集を行った。第Ⅳ章付節については大阪府教育委員会文化財保護課　宮崎泰史氏に玉稿を賜った。調査・整理に当たって大阪府教育委員会文化財保護課の他、西岡巌・池田毅(前貝塚市教育委員会)、前田浩一(貝塚市教育委員会)各氏から御指導、御教示を得た。記して感謝の意を表する。

6．遺構の写真撮影は調査担当者、遺物の写真撮影は小倉勝が担当した。

7．本書に記載した遺構図の方位は、国土座標第Ⅵ系の座標北である。

8．本書で使用した標高はＴ．Ｐ．（東京湾標準潮位）である。

9．本書で用いた遺構の表記は当協会の発掘調査規程に基づき遺構の種類に関わらず、検出順に通し番号を付し、遺構の記号を記入して種類を示した。

10．本書で用いた土壌色は、小川正忠・竹原秀雄編著「新版標準土色帖５版」（1976）による。

11．本調査にあたっては、写真・実測図等の記録資料およびカラースライドを作成した。それらは当協会資料班において保管している。広く利用されたい。

目　　次

巻頭図版
序文
例言

本文目次

第Ⅰ章　調査に至る経過と方法
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査の方法 …… 岡本　3
第Ⅱ章　位置と環境 …… 岡本　5
第Ⅲ章　1987年度調査の成果
　第1節　調査の経過 …… 岡本　7
　第2節　層序 …… 山上　8
　第3節　遺構と遺物 …… 岡本・山上　11
　第4節　包含層の遺物 …… 岡本・山上　29
　第5節　小結 …… 山上　40
第Ⅳ章　1990年度1次調査の成果
　第1節　調査の経過 …… 木下　45
　第2節　各地区の調査成果 …… 木下　46
　第3節　出土遺物 …… 木下　48
　第4節　小結 …… 木下　51
付　節　　脇浜遺跡出土のイヌについて …… 宮崎　52
第Ⅴ章　1990年度2次調査の成果
　第1節　調査の経過 …… 虎間　59
　第2節　層序 …… 虎間　59
　第3節　遺構各説 …… 虎間　67
　第4節　小結 …… 虎間　78

挿図目次

第１図　脇浜遺跡調査区位置図 …… 2
第２図　調査地区割図 …… 4
第３図　脇浜遺跡周辺遺跡分布図 …… 6
第４図　1987年度調査深掘地区位置図 …… 7
第５図　調査区全体図・土層断面図 …… 9～10
第６図　22－ＯＤ平面図・断面図 …… 12
第７図　22－ＯＤ竈平面図・断面図 …… 12
第８図　22－ＯＤ出土遺物（１） …… 13
第９図　22－ＯＤ出土遺物（２） …… 14
第10図　26－ＯＤ・竈平面図・断面図 …… 16
第11図　26－ＯＤ出土遺物（１） …… 17
第12図　26－ＯＤ出土遺物（２） …… 18
第13図　溝平面図・断面図 …… 19
第14図　21－ＯＨ平面図・断面図 …… 20
第15図　23－ＯＸ平面図・立面図 …… 21
第16図　23－ＯＸ出土遺物（１） …… 22
第17図　23－ＯＸ出土遺物（２） …… 22
第18図　01－ＯＯ平面図・断面図 …… 24
第19図　05－ＯＯ平面図・断面図 …… 25
第20図　06・10・24・29・30－ＯＯ平面図・断面図 …… 26
第21図　柱穴平面図・断面図 …… 27
第22図　柱穴・溝・土壙出土遺物 …… 28
第23図　第１・２層出土遺物 …… 30
第24図　貞觀永寶拓影 …… 30
第25図　第４層出土遺物 …… 31
第26図　第５層出土遺物（１） …… 33
第27図　第５層出土遺物（２） …… 35

第28図　第５層出土遺物（３）……37
第29図　第６－Ⅰ層出土遺物……38
第30図　古墳時代遺物出土分布図……39
第31図　1990年度１次調査区位置図……45
第32図　Ｐ11南壁土層断面図……46
第33図　Ｐ12東壁土層断面図……47
第34図　Ｐ11出土遺物（１）……48
第35図　Ｐ11出土遺物（２）……49
第36図　Ｐ12出土遺物……50
第37図　1990年度２次調査基本層序……60
第38図　包含層出土遺物（１）……61
第39図　包含層出土遺物（２）……62
第40図　包含層出土遺物（３）……62
第41図　調査区平面図・断面図（１）……63～64
第42図　調査区平面図・断面図（２）……65～66
第43図　02－ＯＳ断面図……67
第44図　02－ＯＳ瓦出土分布図……68
第45図　02－ＯＳ出土遺物（１）……69
第46図　02－ＯＳ出土遺物（２）……70
第47図　02－ＯＳ出土遺物（３）……71
第48図　02－ＯＳ出土遺物（４）……72
第49図　02－ＯＳ出土遺物（５）……73
第50図　06－ＯＲ断面図……74
第51図　06－ＯＲ出土遺物……74
第52図　05－ＯＲ出土遺物（１）……75
第53図　05－ＯＲ出土遺物（２）……75
第54図　03・05・07－ＯＲ断面図……76
第55図　出土瓦分類図……78
第56図　地蔵堂廃寺出土瓦……79

表

第１表　頭蓋骨の計測値一覧 …… 55
第２表　下顎骨の計測値一覧 …… 56
第３表　頸椎骨および後肢骨計測値一覧 …… 57
第４表　後肢骨の計測値一覧 …… 58

図版目次

図版１　1987年度調査区全景
図版２　土層断面Ａ、土層断面Ｂ
図版３　22－ＯＤ、22－ＯＤ　竈
図版４　26－ＯＤ、26－ＯＤ　竈
図版５　21－ＯＨ、23－ＯＸ
図版６　25－ＯＯ、02－ＯＯ、14－ＯＰ、03－ＯＯ、遺構検出状況
図版７　22－ＯＤ出土遺物１
図版８　22－ＯＤ出土遺物２
図版９　26－ＯＤ出土遺物１
図版10　26－ＯＤ出土遺物２、各遺構出土遺物１
図版11　各遺構出土遺物２、第４層出土遺物１
図版12　第４層出土遺物２、第５層出土遺物１
図版13　第５層出土遺物２、第６－Ｉ層出土遺物１
図版14　第５層出土遺物３
図版15　第５層出土遺物４、第６－Ｉ層出土遺物２
図版16　1990年度１次調査区全景
図版17　Ｐ11全景、土層断面
図版18　Ｐ12全景、土層断面
図版19　Ｐ11出土遺物１

図版20　Ｐ11出土遺物２
図版21　Ｐ11、Ｐ12出土遺物
図版22　出土犬骨１
図版23　出土犬骨２
図版24　1990年度２次調査区全景
図版25　基本層序、02－ＯＳ土層断面
図版26　02－ＯＳ全景
図版27　第２遺構面全景１
図版28　第２遺構面全景２
図版29　06・09－ＯＲ、05－ＯＲ全景
図版30　包含層・02－ＯＳ出土遺物１
図版31　包含層・02－ＯＳ出土遺物２
図版32　02－ＯＳ出土遺物１
図版33　包含層・02－ＯＳ出土遺物３
図版34　02－ＯＳ出土遺物
図版35　包含層・02－ＯＳ出土遺物４
図版36　06・05－ＯＲ出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経過と方法

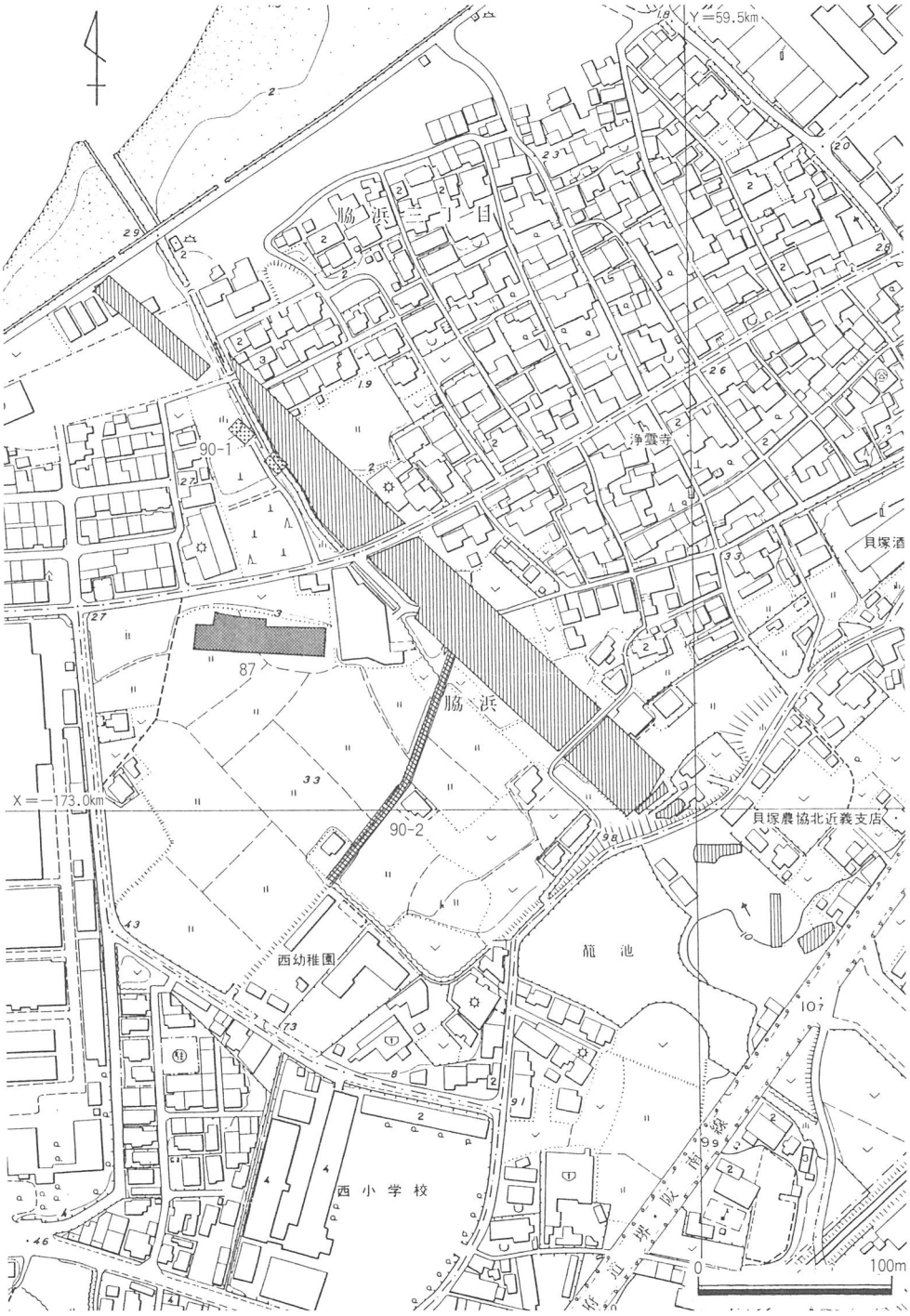
第１節　調査に至る経過（第１図）

脇浜遺跡は貝塚市脇浜地内に所在する。本遺跡の本格的な調査については、泉佐野市沖に建設中の関西国際空港の開港にともなう整備計画の一貫として計画された都市計画道路貝塚中央線予定地内と墓地移転等の関連事業に先立って行なわれたものが主なもので、当協会では1985年以降海底部の試掘調査を含め７次にわたる発掘調査を実施している。

脇浜遺跡に関係する既往の調査をたどってみると、1975年度、1979～80年度に（財）大阪文化財センターが、脇浜・畠中・石才・近義堂の各遺跡の試掘調査[1]を実施している。この時の脇浜遺跡の調査は南海本線に西側の段丘上で行われ、近現代の粘土採りのために遺構面の破壊が進んでいることが報告されている。

その後、関西国際空港建設にともなって、近畿自動車道松原海南線をはじめ都市計画道路貝塚中央線の建設も急がれることとなり、1985年度に当協会によって予定地内に所在する脇浜遺跡の調査が行われた。1985年度の調査では、段丘上はそれまでの調査結果に記されているように、粘土採掘の跡が一面に広がり、良好な遺構・包含層を認めることはできなかった。一方、段丘下の低地部では縄文時代以降各時代の砂推・自然流路が検出され、古墳時代・中世の柱穴群がその砂推上に検出された。古墳時代では河口部であったものが、中世には沼地化し、以後耕地として利用され、徐々に陸地化が進んでいる状況を明らかにしている。さらに古墳時代前期から後期にかけての蛸壺・製塩土器・土錘等漁撈関係の遺物が多量に出土し、海浜部にある遺跡の性格を明らかにした。

1986年度以降の調査は[2・3]、より現在の海岸部に近い地域について実施され、陸化の形成過程を明確にすることに主眼をおいて調査が進められた。これら一連の調査の結果、古墳時代以降に陸地化が進み、現在に到っていることが明らかとなった。本書に記載する報告は、1988年１月～３月および1990年８月、1991年１月～３月に行なわれた計３回の調査成果についてまとめたものである各調査の経過については、本書各章に記している。



第１図　脇浜遺跡調査区位置図

第２節　調査の方法（第２図）

今回の調査は当協会発行の発掘調査規程に基づいて実施した。

調査区の地区割りは、新版大阪府都市計画図（１/2500）を12等分し、500ｍの大区画を作る。さらに大区画を25等分し、100ｍの中区画を作る。さらに中区画を625等分し、４×４ｍの小区画を作った。

調査は、最も上層の耕作土を重機によって除去した後、それより下層を人力によって掘削した。遺構面は調査地点によって微妙に異なるが、1987年度の調査では中世耕作面の他、黒褐色砂層をベースにした遺構面を検出した。後者からは、古墳時代から平安時代に至る遺構が検出されたが、それらを各時代の遺構面としてとらえることはできなかった。最終的には、黒褐色砂層の下層に見られる黄色砂層を掘り抜き、更新世に形成されたと考えられる礫層の上面まで掘削した[4]。また、調査区内には随時土層観察用の「あぜ」を設定し、調査区内における遺構面の統一を計るように努めた。出土遺物の取上げは、小区画をもとに行った。

平面図は国土座標をもとに、遺物の出土状況等については縮尺１/10・１/20を基調に現地で、遺構全体図等については航空写真測量により、縮尺１/20・1/100を作成した。

写真撮影は、小型カメラ（35㎜一眼レフ）および中型カメラ（６×７）を使用した。

本書に使用した遺構の略称は下記の通りである。

竪穴住居－ＯＤ　土壙－ＯＯ　溝－ＯＳ　柱穴－ＯＰ　土器溜り他－ＯＸ

註

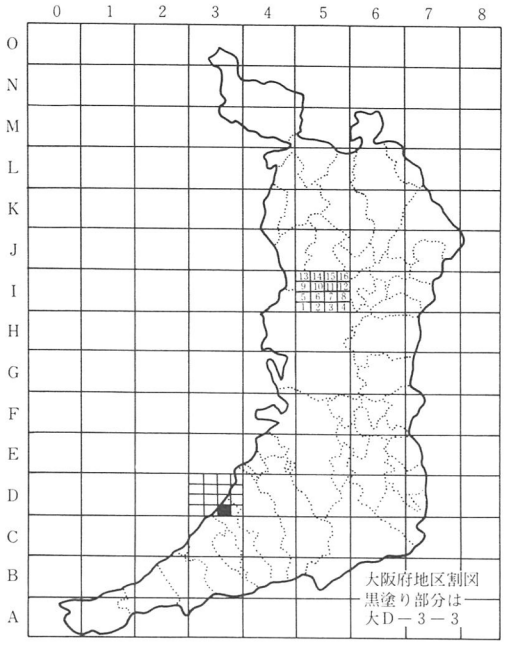
(1)（財）大阪文化財センター「都市計画道路貝塚中央線建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書」　1976年

（財）大阪文化財センター「大阪府都市計画街路貝塚中央線新設工事予定地内　脇浜・畠中・石才・近義堂遺跡試掘調査報告書」　1980年

(2)（財）大阪府埋蔵文化財協会「脇浜遺跡発掘調査報告書」　1986年

(3)（財）大阪府埋蔵文化財協会「脇浜遺跡Ⅱ発掘調査報告書」　1988年

(4) 前掲書「脇浜遺跡Ⅱ発掘調査報告書」　1988年



500m の区画

A	B	C	D
E	F	G	H
I	J	K	L

①

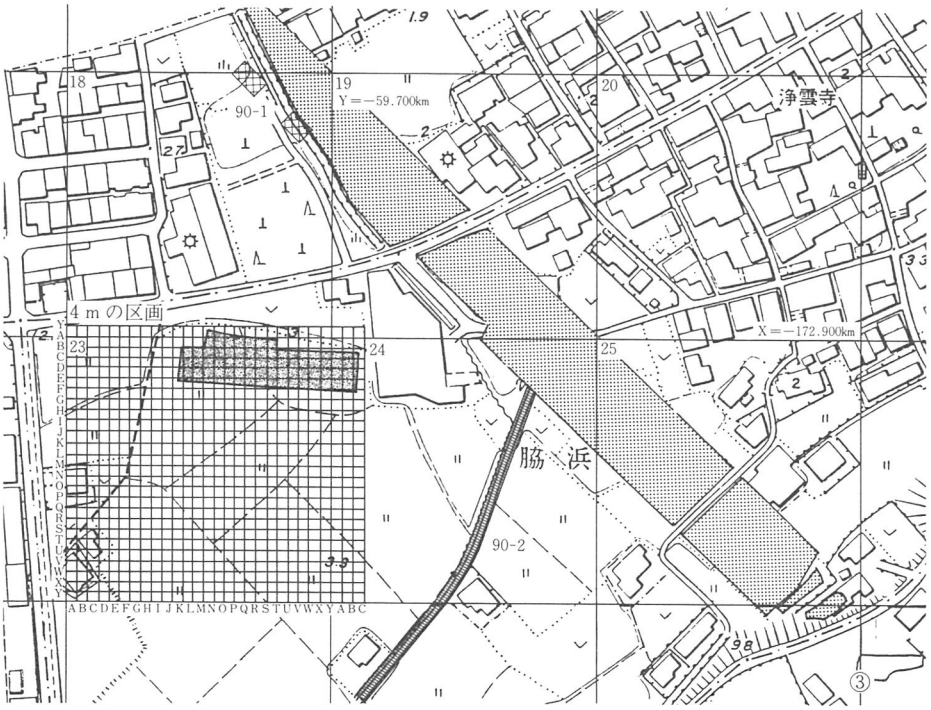
100m の区画

01	02	03	04	05
06	07	08	09	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

②

大D－3－3　　A23　DX

地形図の標題 500m　100m　4m



第２図　調査地区割図

第II章　位置と環境

脇浜遺跡は貝塚市脇浜に所在し、脇浜集落の南に広がっている。南には和泉山脈に源を発し、水間を経て大阪湾に流入する近木川が、東南東－西北西方向に流れている。北側にはやはり和泉山脈に源を発する津田川が流れている。遺跡の範囲は中位段丘堆積層が構成する中位段丘面上（以下段丘面と呼ぶ）から海浜部に接する沖積面まで広がる広大なものである。

これまでの調査では、旧石器～近・現代までの遺物を検出し、旧河川・土壙・掘立柱建物などの遺構を検出している。段丘面では、近・現代の粘土の採掘穴などによる攪乱が激しく、顕著な遺構を検出していない。海浜部の沖積面では、縄文時代の遺物を含む河川と古墳時代の旧河道・土器溜りなどが検出された。調査区からは多量の遺物が出土している。特に蛸壺・製塩土器などが多量に検出され海浜部の遺跡の特徴を表している。今回の調査地点は中位段丘堆積面の上部に位置し、海岸に程近い砂堆上にあたると考えられていた。

本遺跡周辺の遺跡を見ると、旧石器時代は本遺跡の他、海岸寺山遺跡でナイフ形石器や剝片が表採されている。縄文時代は岸和田市春木八幡山遺跡（中期～晩期）、同箕土路遺跡（中期）、土器棺や大量の石器を出土した同山ノ内遺跡（後期～晩期）、和泉市小田遺跡（前期～晩期）があり、小田遺跡ではトチの実を伴うピットも検出されている。

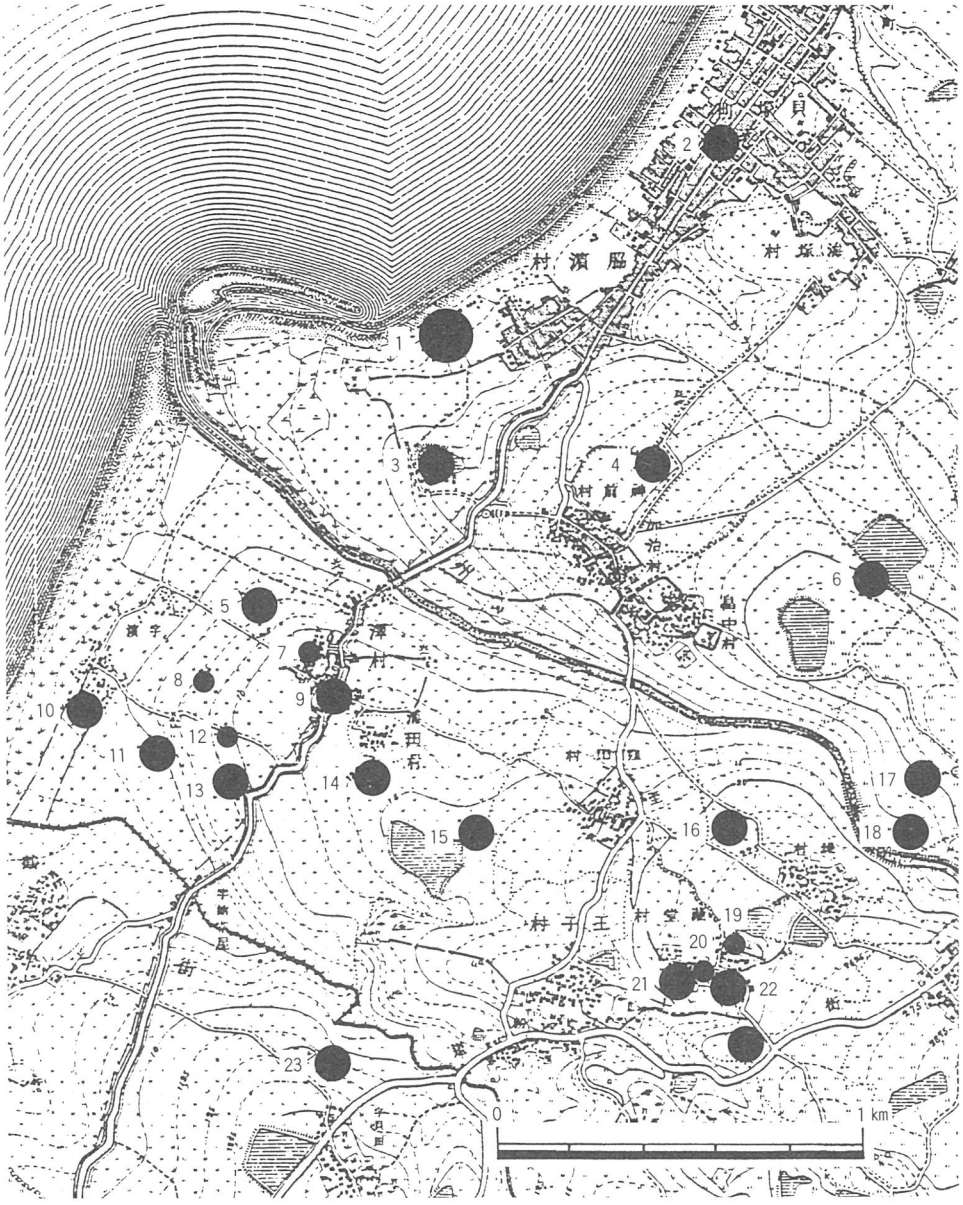
弥生時代では中期の遺跡が多く知られている。津田川と近木川の間には、畠中遺跡・石才南遺跡・清児遺跡・河池遺跡・海岸寺山遺跡・半田遺跡があり、本遺跡でも大型の石包丁が出土している。近木川と見出川の間では沢新田遺跡・沢遺跡・窪田遺跡がある。後期の遺跡は新井ノ池遺跡で土器片が採集されているのみで様相は不明である。

古墳時代では全長72mの前方後円墳丸山古墳（前期末～中期）が本遺跡の南東約1.7kmの地点にあり、その近くに古式の須恵器をともなった地蔵堂の方墳が知られている。集落あるいは生産関係の遺跡では、本遺跡の他、古い須恵器と大型の掘立柱建物が検出された石才南遺跡、後期の畠中遺跡・堀遺跡・沢共同墓地・海岸寺山窯址群等が知られている。

奈良時代では、加治・神前・畠中遺跡と清児遺跡、寺院跡とされる秦廃寺がある。

平安時代では畠中遺跡で掘立柱建物群が検出されている。また、地蔵堂廃寺が寺院址として知られている。

中世以降では畠中遺跡・地蔵堂廃寺遺跡・澱池遺跡が知られている。



1．脇浜遺跡　2．貝塚寺内町遺跡　3．長楽寺跡　4．加治、神前、畠中遺跡
5．沢共同墓地遺跡　6．今池遺跡　7．沢西出遺跡　8．沢海岸北遺跡
9．沢城跡　10．沢新出遺跡　11．沢海岸遺跡　12．沢遺跡
13．明楽寺跡　14．澱池遺跡　15．窪田遺跡(窪田廃寺)　16．堤遺跡
17．橋本遺跡　18．積善寺城跡　19．丸山古墳　20．地蔵堂廃寺
21．地蔵堂遺跡　22．王子遺跡　23．貝田遺跡　24．下新出遺跡

第３図　脇浜遺跡周辺遺跡分布図

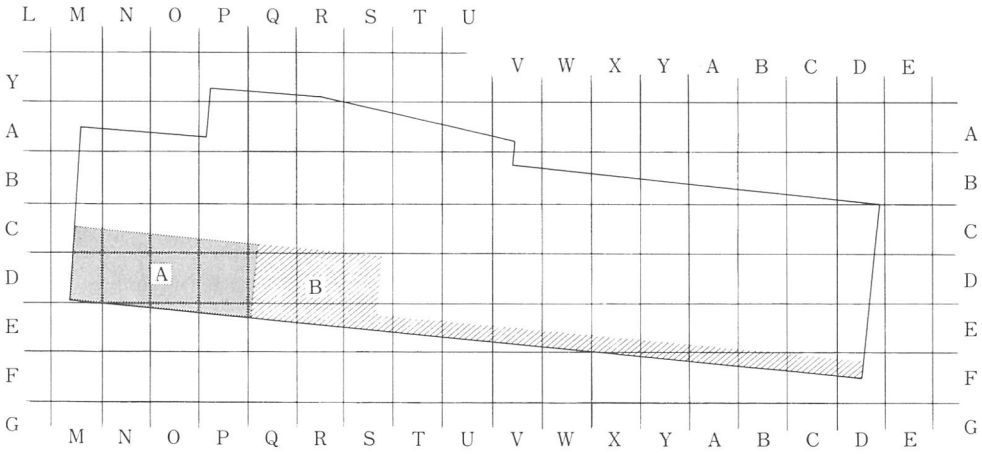
第Ⅲ章　1987年度の調査成果

第１節　調査の経過

今回の調査地は、道路工事の進展に伴い貝塚中央線予定地内に所在する脇浜地区の墓地の移転先であり、道路用地ではないものの、道路工事に付随するものとして発掘調査を実施することとなった。現地調査は1988年１月28日に着手し、1988年３月25日に終了した。整理作業は調査終了後に着手し、1989年３月31日に終了した。

調査地は脇浜遺跡の沖積面に位置し、埋め立て前の海岸線からは210mの地点である。この地点は縄文晩期以降陸化が進み、古墳時代には海岸線に沿って形成された砂堆（先の報告書では浜堤と呼んでいる）の上に立地すると考えられた地点である。ここは、1985年度調査のⅢ区で検出された古墳時代前期以降の流路群から南へ約50m離れた箇所になる。前回の調査ではこの流路群の南側から既に砂堆の隆起が見られ、調査地点を中心に海岸線に沿って、広がっていると予想されていた。調査はこの砂堆上に東西65m、南北最大幅18mの調査区を設定して行った。

調査手順は前述の通り第１層、耕作土を重機で除去し、以下を人力掘削で行った。現地表下約60㎝（Ｔ．Ｐ．＋2.6m）付近までは、砂質シルト主体の中世の包含層が堆積していた。その下位からは砂層になり、古墳時代から平安時代を中心とした遺構・遺物が多量に



第４図　深掘地区位置図

検出された。脇浜遺跡ではこれまで顕著な遺構はなく、遺跡本体部分は貝塚中央線の南側にあると考えられてきたが、本地点が遺跡本体の一部分であることが明確となった。

この遺構面を調査終了後、これまでの調査で行われてきた、基盤層（更新統の砂礫層）の検出と砂堆の成因を追求するため、遺構の希薄な部分を選んで下層を深掘りした。第4図のとおりBの部分についてはT.P.+1.1mまで掘削し、主として砂堆下層の遺物包含状況と堆積の方向を調査した。Aの部分についてはT.P.−1.1mまで掘削し、基盤層の検出に努めた。この結果、下層で若干の植物遺体層を検出したが、縄文土器など砂堆の起源を探る遺物は検出できなかった。また、基盤層と呼んでいる砂礫層はT.P.−1.0m付近で検出された。1985年度調査のIII区でもT.P.−1.0m前後で検出されている。

第2節　層　序（第5図、図版2）

調査地点の現地表は標高T.P.+3.2m前後で、調査前の現況は水田として利用されていた。堆積層は現代耕土以下、洪積層ともくされる基盤の層まで10層に大別される。

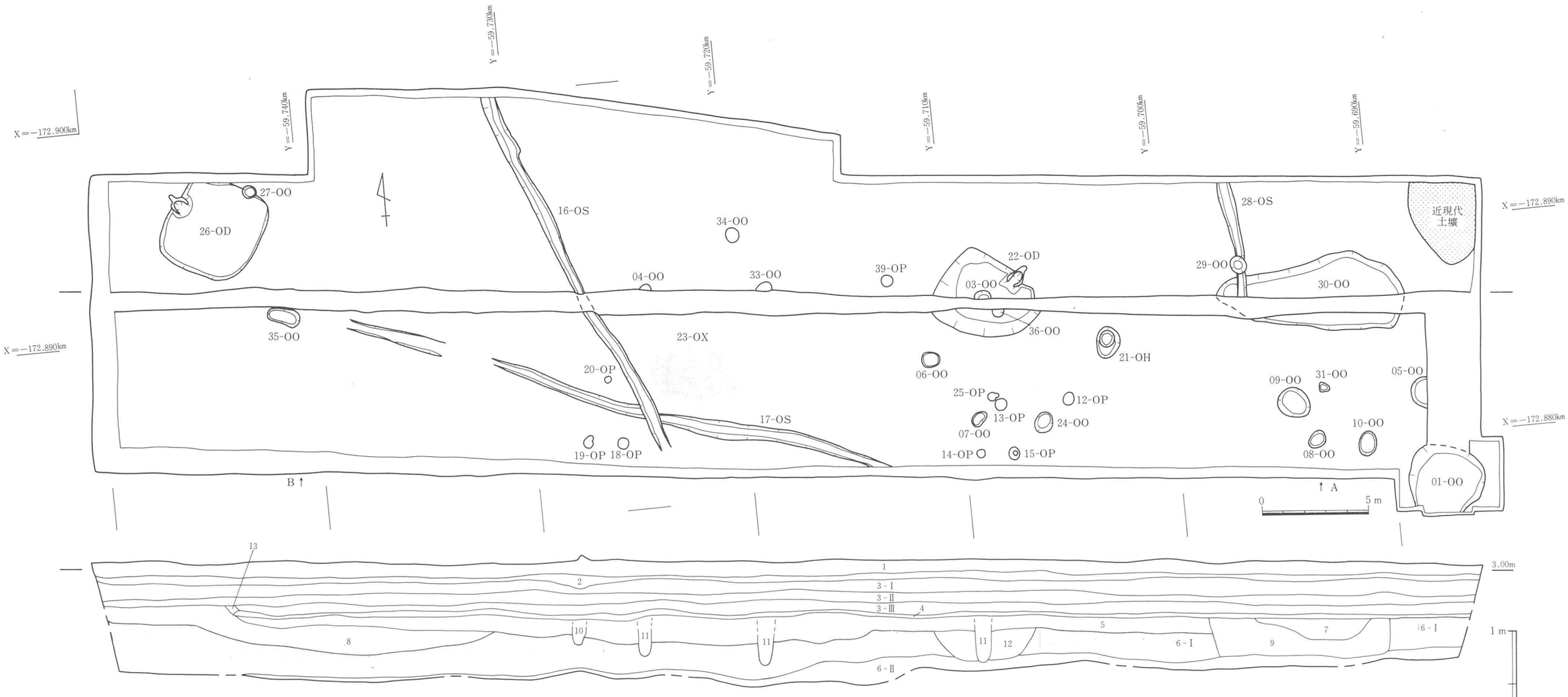
第1層・第2層　現代耕作土及び床土である。平均層厚20㎝弱である。部分的にみられるものとして、調査区西南部の一部で床土の直下に親指〜拳大の礫主体の層が分布する。礫層の上部には近世遺物を含み、水田造成時及び、耕作時の攪乱を受けている。

第3層　黄橙色系から赤褐色系の混礫砂質シルト主体の層で3層に細別される。平均層厚約30㎝で調査区全域に分布する。調査区西部では第3−II層が第3−III層以下、第6−I層を削って堆積している。このため第3−III層は調査区西部には分布しない。中世遺物の細片を含む堆積層で遺構は検出できなかった。

第4層　褐色の砂質土層である。鉄分が沈着し非常によく締まっている。層厚5㎝弱で調査区西部には存在しない。奈良・平安時代の遺物を含む、本層下端でピット・土壙が検出される。

第5層　黒褐色砂層で、ルーズな砂層である。層厚は10〜30㎝あり、本層下部の標高はT.P.+2.5〜2.3mである。調査区西部には分布しないが、竪穴住居などの遺構埋土となっている。古墳時代遺物を多く含み、奈良〜平安時代の遺物も上位から出土している。本層中で古墳時代の遺構が、上位で奈良・平安時代の遺構が検出される。

第6層　緑灰色混礫砂層、黄色系砂層からなり、3層に細別される。第6−I層は調査区西部にのみ堤状に認められる。この付近では第3−III層から第5層まではこの層に沿っ



1. 5GY 6/1 オリーブ灰色土層(耕作土)
2. 7.5YR8/8 黄橙色土層(床土)
3-Ⅰ. 7.5YR8/8 黄橙色土層
3-Ⅱ. 2.5YR4/8 赤褐色土層
3-Ⅲ. 2.5YR3/6 暗赤褐色土層
4. 2.5YR4/6 赤褐色砂混じり土層(Fe沈澱層)
5. 5YR 3/1 黒褐色砂層
6-Ⅰ. 2.5Y 7/8 黄色砂層
6-Ⅱ. 2.5Y 7/8 黄色砂層(やや粗い砂粒が入いる)
7. 2.5Y 7/8 黄色砂層(細かい砂粒を含む)
8. 10G 6/1 緑灰混礫層
9. 7.5YR3/3 暗褐色礫混粗砂層(3cm以下の円礫含む)
10. 10GY 6/1 緑灰色粘質土混じり粗砂
11. 5YR 3/1 黒褐色砂層(5.より細かい粒子)
12. 5YR 3/1 黒褐色砂層(5.よりやや細かい粒子)
炭・焼土を若干含む
13. 2.5YR3/1 暗赤灰色中砂～粗砂

第5図　調査区全体図・土層断面図

てせり上がり、上位の層によって削平されている。層中に少量の遺物を含む。第６－II層は層厚20㎝から40㎝あり、全域に分布する。

第６－III層以下は、調査区南端に設けたトレンチで確認した層である。Ｔ．Ｐ．＋1.1～Ｔ．Ｐ．－1.1ｍまでは調査区西南部の深掘りで確認した。断面図を掲載していないが、砂と礫の互層からなり、層界は砂粒径の他、色調によったところもある。第７層～第９層は本遺跡に人の営みを残す以前の砂堆を形成する沖積層である。第７層の上位には植物遺体層が認められた。全体の平均層厚は約２ｍである。

第10層　本地区の基盤となる洪積層で緑灰色系の、直径１～２㎝前後の礫混じりシルト層である。上層に比べてよく圧密を受けている。上面の標高はＴ．Ｐ．－１ｍである。

第３節　遺構と遺物

古墳時代後期の遺構

この時期の遺構は竪穴住居址・溝・炉跡・土器溜り・土壙が検出された。中でも、竪穴住居址２棟が海岸の砂堆上で検出されたことは注目される。

竪穴住居址

22－ＯＤ（第６～９図、図版３・７・８）

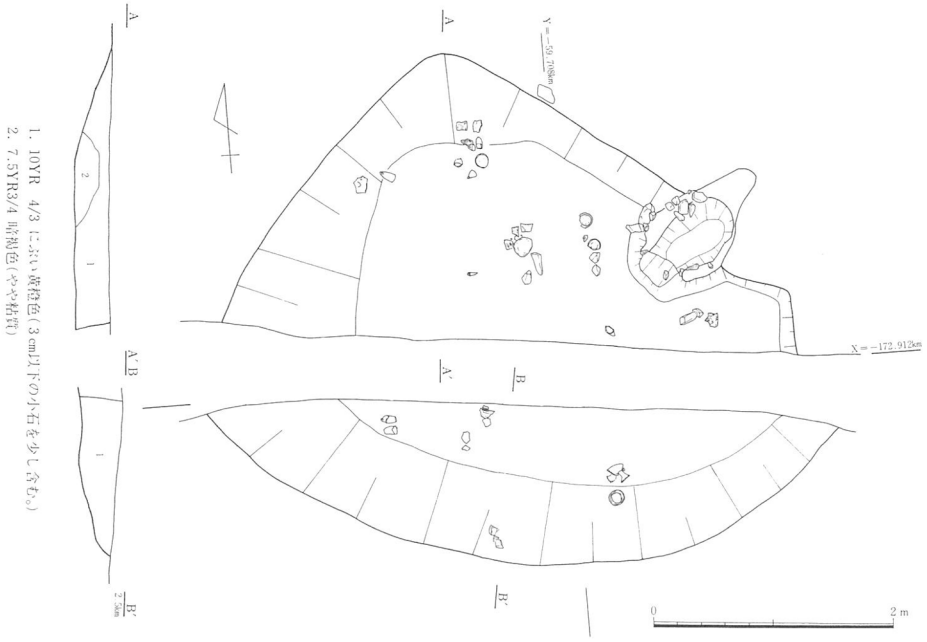
この住居址は、調査区中央部、Ａ23ＤＷ地区を中心に位置する。黒褐色砂層をベースに構築されている。

平面プランは不定形を呈し、東西5.0ｍ、南北4.2ｍを測る。ベースが黒褐色の砂土壌であるため遺構の検出は困難であった。また、踏み締めによる遺物の沈下が起こっており、床面など、若干掘り込んだ形で検出した。平面プランが不定形に検出されたことは、この住居址が廃棄された後、短期間で崩壊が進んだためと思われる。北側にコーナーを持つことから西壁に一辺の長さを求めると、一辺約3.5ｍの方形のプランを呈していた可能性もある。主軸を西壁にとると、Ｎ－42°－Ｗである。

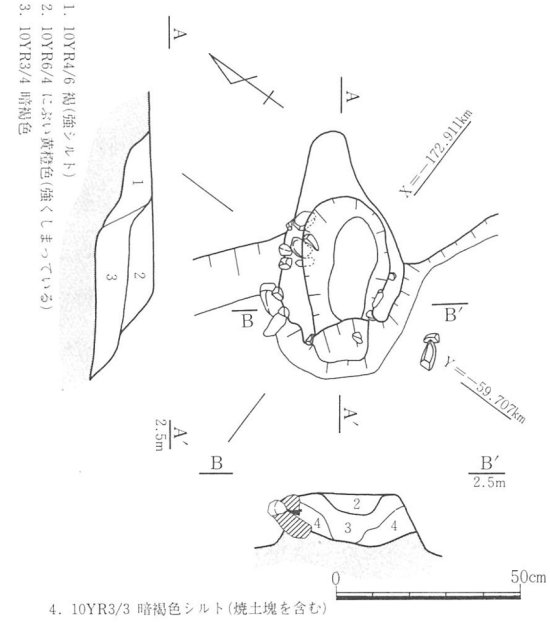
床のレベルは、土層断面より推定して、Ｔ．Ｐ．＋2.10ｍであり、床面から検出面までの高さは、約30cmである。壁面はなだらかに傾斜し、周溝、柱穴は検出できなかった。

埋土には、少し粘りのある黒褐色砂が堆積し、ベースの砂とさほど変わらない。

北側のコーナーから西側2.5ｍに作り付けの竈が存在する。竈は住居址壁面を削り込む形で、煙道が住居址の外へ延びる。袖は床面に灰白色のシルトを置土して構築している。



第６図　22－ＯＤ平面図・断面図



第７図　22－ＯＤ竈平面図・断面図

規模は全幅70.0㎝、右袖長40.0㎝、幅18.0㎝、左袖長60.0㎝、幅20.0㎝、焼成部の幅25.0㎝、奥行き70.0㎝を測る。焼成部は赤く焼きしまっていた。また、袖には５～20㎝大の石、土師器の甕が埋め込まれていた。

出土遺物は須恵器78片、土師器234片が出土している。

１～４は須恵器杯蓋である。口径は10.4㎝～11.6㎝を測る。天井部と体部の境には稜は無く、口縁部は垂下し、端部は丸くおさまる。４は少し歪んでおり、口縁部が少し内側に折れる。全体に回転ナデ調整が施されるが、外面天井部はヘラ切り未調整である。全体

によく焼きしまっている。1は天井部に砂が多量に付着する。

5～8は、杯身である。口径は9.8～11.05㎝を測る。立ち上がりは短く内傾する。口縁端部は丸くおさまるか、やや尖りぎみにおさまる。5はヘラ記号が入る。6の焼成は甘く悪い。外側に火ダスキがある。7は外面全体に深緑色の自然釉が前面にかかる。

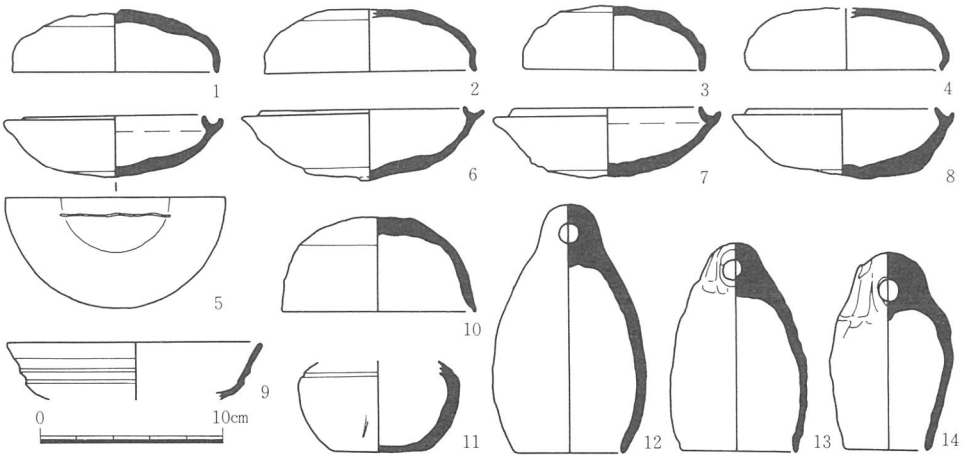
9は高杯の杯部である。回転ナデ調整の他、外面の下位を回転ヘラケズリ調整が施されている。外面体部中位に、2条の凹線が削り出される。器壁は薄く焼きしまっている。

10は壺の蓋と考えられる。全体に回転ナデ調整が施されるが、外面天井部に、一方向の静止ヘラケズリが入る。口縁部は若干開き、口縁端部は尖り気味におわる。焼成は良い。

11は、体部のみの𤮈である。内面は回転ナデ調整が施され、外面は回転ヘラケズリが施される。体部上位に一条の沈線が入る。外面にヘラ記号が認められる。

12～14は蛸壺である。ロクロの痕跡が明瞭に残る。紐部は縦方向にナデる。

15・16は土師器の杯である。体部は丸く立ち上がり、口縁部は外面に強いヨコナデ調整が入り、少し外反し、口縁部は丸くおわる。胎土は精製されており、焼成も共に良い。15は橙色、16は浅黄橙色を呈する。15の口縁部は13.2㎝、器高6.0㎝を測る。外面体部上位から口縁部にかけ、横方向のヘラミガキ調整、外面底部にヘラケズリ調整が施される。内面は、底部から体部上位にかけ放射状暗文、口縁部には、ヘラミガキの上にラセン状の暗文が施される。外面体部中位には指圧痕が残る。16は口径15.3㎝、器高6.0㎝を測る。
内面に、底部から口縁部下位にかけ放射状暗文が施される。全体にナデ調整が施されているが、外面底部に指圧痕跡が残る。

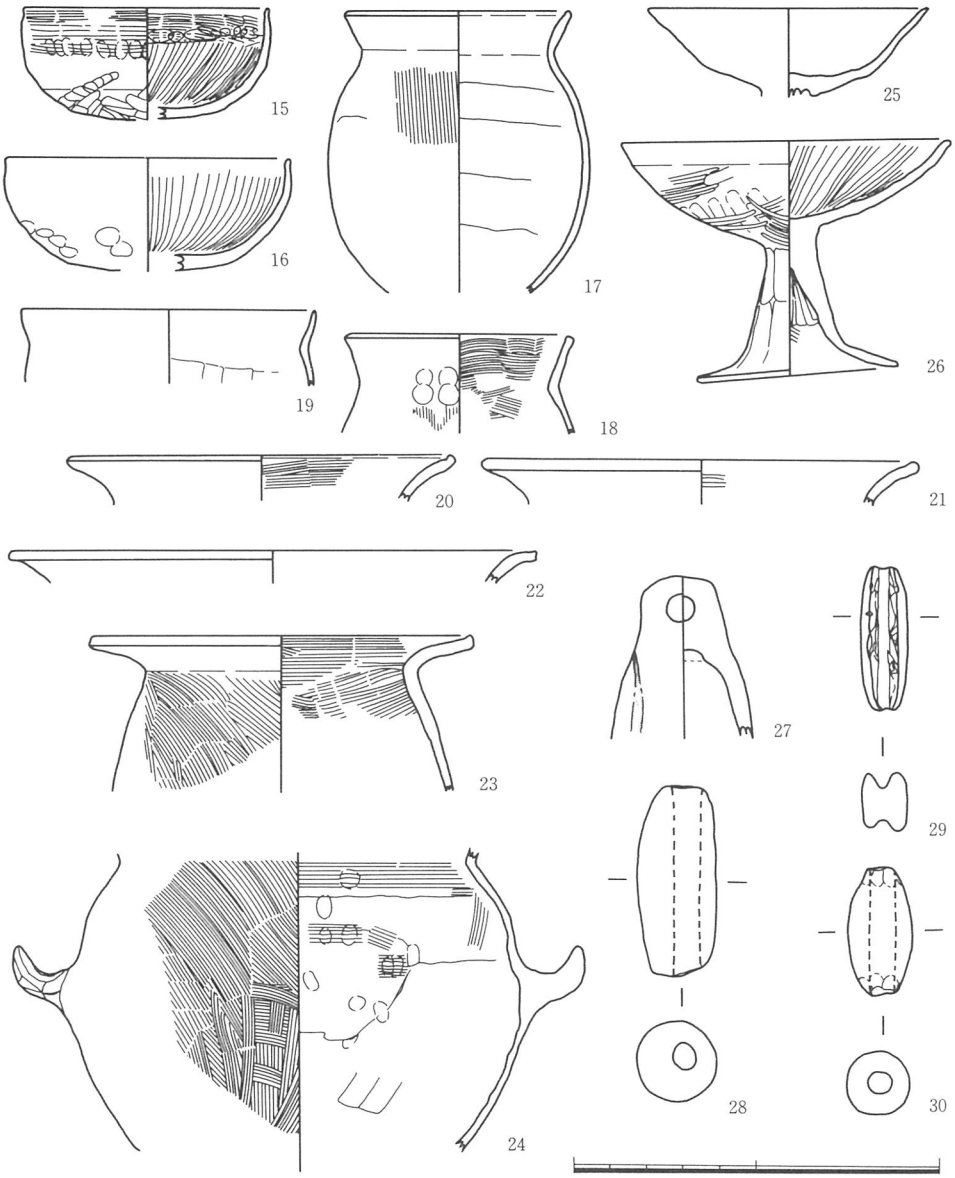


第8図　22－ＯＤ出土遺物(１)

甕は、17・18の様に小型で口縁部が小さく外反するものと、20～23の様に外反の強いものとがある。17・18の体部外面はタテハケ、18・20・21・23の内面にはヨコハケが入る。

24は把手付きの甕で、内外面にハケメ調整、内面にヘラケズリ調整、指圧痕が見られる。

25・26は高杯である。25は杯部のみで大きく開く。26の杯部は椀形を呈し、内面に放射



第９図　22－ＯＤ出土遺物（２）

状の暗文が入り、外面はヘラミガキが施される。脚柱は中実で、絞り目が残る。脚の内面はナデられている。胎土は精製されている。

19は鉢である。体部内面にヘラケズリが施される。

27は蛸壺である。内面はナデられる。須恵器より肉厚である。

28～30は土錘である。28・30は中空のもの、29は背の割れるものである。28は大型で細長く、30は小型で、体部中位が膨らむ。

26－ＯＤ（第10～12図、図版４・９・10）

調査区の南端、Ａ23ＢＮに位置する。西端の一部が調査区外にのびていた。長辺（東西方向）4.56m・短辺（南西方向）4.4mでやや東西に長い方形プランのものである。

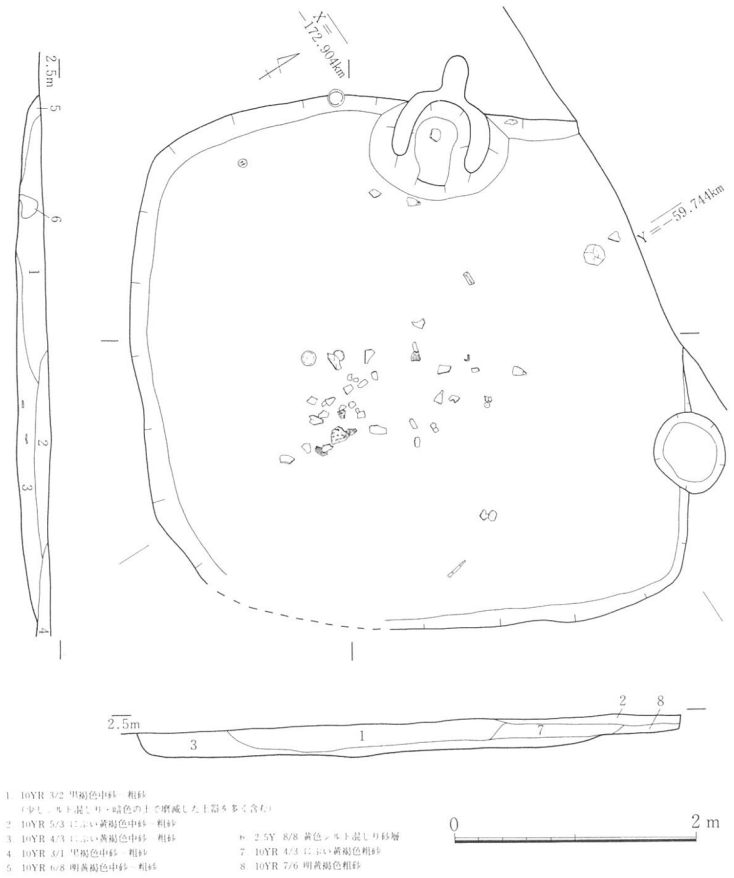
標高2.4m前後で黄色粗砂をベースとする砂層を掘り窪めて構築されていた。壁は最も良く残っている所で0.18m前後を測る。柱穴、壁溝などは検出できなかったが、東西辺の中央やや西寄りには作り付けの竈が設けられていた。埋土は周囲よりやや暗色で同質の層に若干のシルトを含んだものである。しかし、埋土と基盤になっている砂との差は微妙なもので、壁周辺のプランは崩壊などのためか明確に検出できなかった。さらに壁際は構築後の変形のため直立せず緩い傾斜を持って検出された。

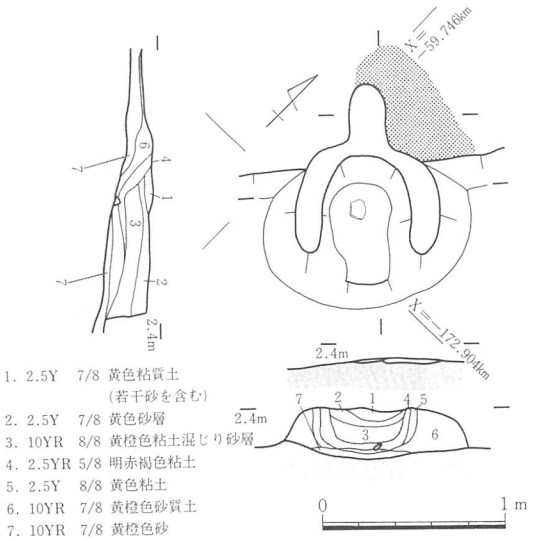
床面についても土層の違いや、遺物・炭等の含み具合から明確にしようと試みたが確実には検出できなかった。図上での床面の高さは遺物を含み、基盤層よりやや暗色な部分を表現している。この面は竈の焚き口の底部よりも下がっており、実際の床面の高さはこれよりも上に位置したと思われる。

竈は煙道の残存部までを含めた全長1.22m、竈本体の長さが0.9m、横幅1.14m、袖の長さは向かって右が0.54m、左が0.58mである。竪穴住居址の南辺のほぼ中央に位置し、壁を削り込んで構築されていた。本体を馬蹄形に作り、主としてシルト質の土で構築していた。しかし、焚き口内側は完全に粘土で塗り固めているが、外壁に近くなると砂混じりになっている。煙道は壁外面に赤く焼けた痕跡が残っていたことから検出できた。煙道の右側は小礫を固めて支えとしていた（第10図下段のアミ目部分）。

22－ＯＤ・26－ＯＤなど、今回の脇浜遺跡で検出された竪穴住居址は砂の上に築かれているため使用時にもかなり壁・床の形が変形したと思われる。竈は段丘の上から運んだシルトによって形が摑めたが竈の存在が無ければ土壙と見分けがつかなかったであろう。

出土遺物は、須恵器杯蓋・身・高杯・瑤・甕・蛸壺、土師器杯・甕・竈・甑・土錘・製塩土器などがある。出土総破片数1043点で、その内、須恵器451点、土師器592点であるが、





第10図　26－ＯＤ竈平面図・断面図

この内訳は甕の破片がほとんどである。甕を除いた点数は、須恵器96点、土師器45点で、須恵器がやや多い傾向が見られた。遺物はほとんどが住居廃棄後投棄されたもので、このうち、図化できたのは26個体、須恵器16点、土師器10点である。

31の須恵器甕は口径20.0㎝、残存高12.8㎝を測る。口縁内面に「＋」字形のヘラ書きを持っている。口縁部は外方へ開き端部は玉縁で終わる。外面は横方向のカキメ調整で仕上げ、内面にはあて具痕跡を残している。

32～34は須恵器杯身である。口径は8.1㎝～10.3㎝、器高2.7～3.9㎝を測り、外面底部はすべてヘラ切り未調整である。いずれも立ち上がりは低く、退化している。35・36も須恵器の杯身である。35は口径10.3㎝、器高2.7㎝で口縁上端に面を持つ。36は口径8.23㎝、器高3.2㎝の小型品だが、丁寧な作りで外面底部をヘラケズリする。

37～41の高杯は低脚（37）のもの、高脚（40・41）のものの２種があり、杯の口径が19㎝前後と、16㎝前後のものがある。37は脚部が非常に低いものである。

42は提瓶の口縁部である。口縁6.3㎝、残存高4.7㎝を測る。内外面ともヨコナデ調整している。

43は瓶の胴部上半である。胴径8.2㎝、残存高4.4㎝で、肩部に２条の凹線を持つ。肩部直下に穿孔を穿つ。頸部内面には絞り目の痕跡を残す。

44・45の蛸壺は釣鐘状のものの上半部の破片である。

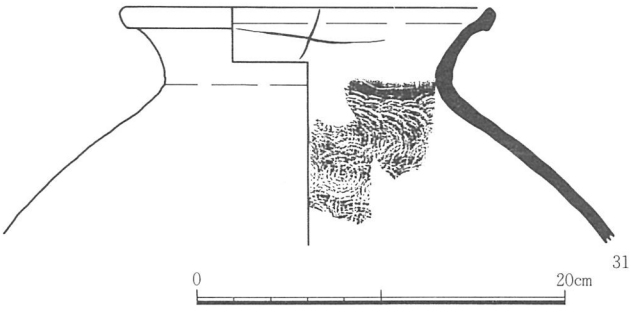
46の土師器杯身は、口径11.6㎝、器高4.1㎝である。内面をヨコナデ調整、外面は未調整である。

土師器甕は２個体（47・48）図化した。47は口径11.8㎝で磨滅が激しく、内外面の調整は不明である。内面に粘土紐の接合痕を残す。48は口径13.4㎝で内面をヘラケズリする。

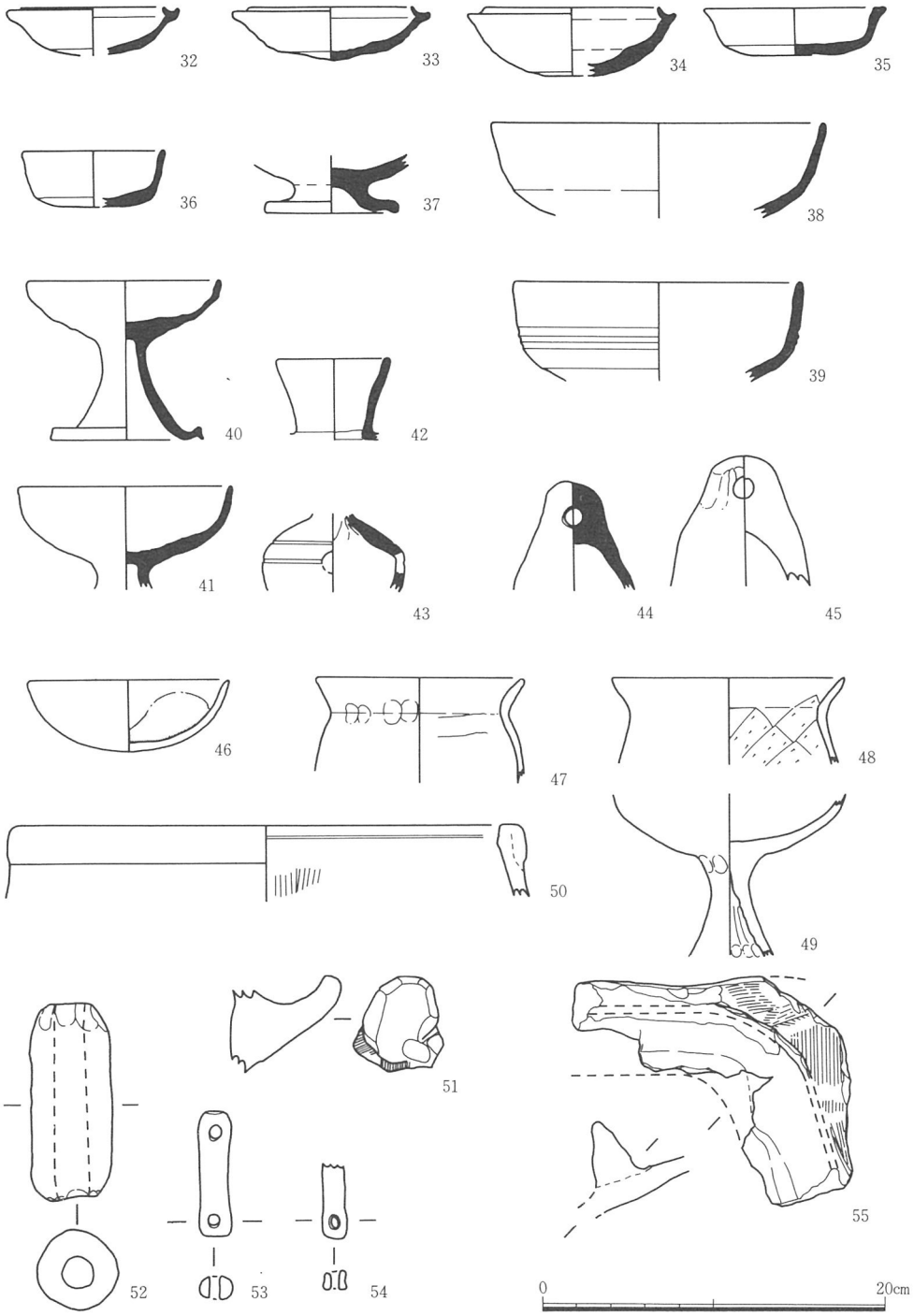
49の土師器高杯は残存高9.3㎝である。

50は土師質の甕で、口径28.5㎝、残存高4.15㎝を測る。

51は土師質の甑あるいは鍋の把手である。器壁に貼付けたのち、ナデで調整しさらに把手周辺をハケメ調整している。



第11図　26－ＯＤ出土遺物（１）



第12図　26－ＯＤ出土遺物（２）

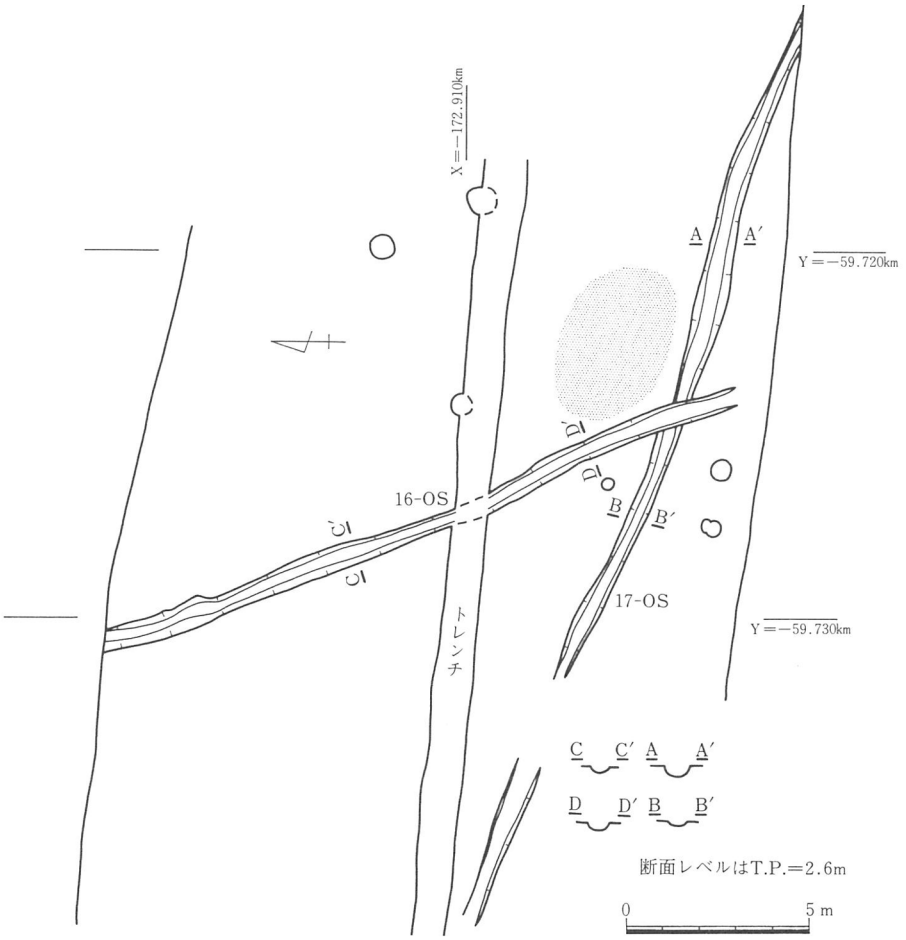
土錘（52～54）は３点出土している。52は管状のもので、長さ11.0㎝、幅4.6㎝である。他の２点は棒状のもので、両端に紐通し穴が開いている。53は長さ4.3㎝、幅1.4㎝。54は中程で欠損しており、幅4.3㎝を測る。

55の竈は正面左側上部の破片である。厚手の作りで内外面をハケメ調整している。色調は暗褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。

以上のように、竪穴住居址出土の遺物には移動式の竈や７世紀に入るような土器の出土もあり興味が持たれる。

溝

16－ＯＳ、17－ＯＳ、28－ＯＳの３本の溝が検出された。埋土はそれぞれ淡灰色の砂混じりシルト（16－ＯＳ）と黒褐色砂（17－ＯＳ・28－ＯＳ）である。



第13図　溝平面図・断面図

16－ＯＳ（第13・22図62～66、図版11）

Ａ23ＡＲ～Ａ23ＥＳに位置する。幅0.4m～0.7m、深さ0.25m、検出長18.4mを測る。断面「Ｕ」字形を呈した素掘り溝である。埋土は粗い砂混じりのシルト質で、内には拳大の円礫を多く含んでいた。17－ＯＳを切っているが、遺物に時期差は見られない。

出土遺物は須恵器杯蓋身・甕・蛸壺、土師器高杯・甕などがある。図化できたものは須恵器杯身１・蛸壺１、土師器甕１・蛸壺２である。

62の須恵器杯身は底部外面をヘラ切り未調整のもので、立ち上がりも退化している。

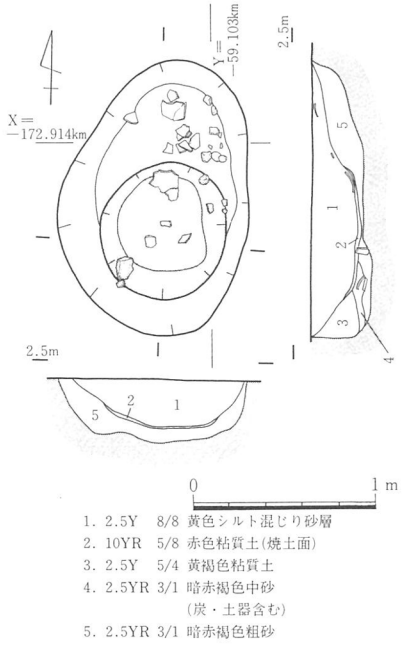
63～65は釣鐘型の蛸壺で、やや大振りの64は胴部をヘラケズリしている。

66の土師器甕は口径23.6㎝、残存高7.1㎝を測る。

17－ＯＳ（第13・22図67～70、図版10）

Ａ23ＤＲ～Ａ23ＥＶに位置する。幅0.4m～0.8m、深さ0.18m、検出長26.5mを測る。断面「Ｕ」字形を呈した素掘り溝である。

出土遺物は古墳時代後期が須恵器杯蓋・甕・蛸壺、土師器甕・蛸壺、古墳時代前期は土師器高杯・蛸壺である。このうち、図示したものは土師器高杯２・蛸壺２である。70の須恵器蛸壺は釣鐘型である。67の土師器高杯は杯部片で口径16.3㎝、残存高4.1㎝を測る。



第14図　21－ＯＨ平面図・断面図

炉　跡

屋外炉が１基出土している。

21－ＯＨ（第14図、図版５）

Ａ23ＥＶに位置する。楕円形を呈する炉跡で、長軸長1.5m、短軸長1.05m、深さ0.26m（検出面から焼土面までの深さ）を測る土壙を掘り、この土壙底に直径0.76mの範囲で焼土面が見られた。焼土面はやや赤色を呈したシルトを搬入し、これを敷いていた。焼土周辺には土師器甕の胴部が散乱していた。

焼土の下（シルト層の下層）は炭混じり黒色砂が20㎝～30㎝の厚さで堆積し、焼土と土師器甕の胴部が数片混じっていた。この黒色砂は徐々に薄くなり基盤層との境は明確になっていない。

当初砂上を焼土面としていたのを後に粘土を上

に貼って使用したものであろう。

遺物は土師器甕の胴部１個体と須恵器甕の細片が出土している。土師器甕の上半は主として縦方向のハケメ調整、下半は不定方向のハケメ調整である。法量は細片のため復元出来なかった。

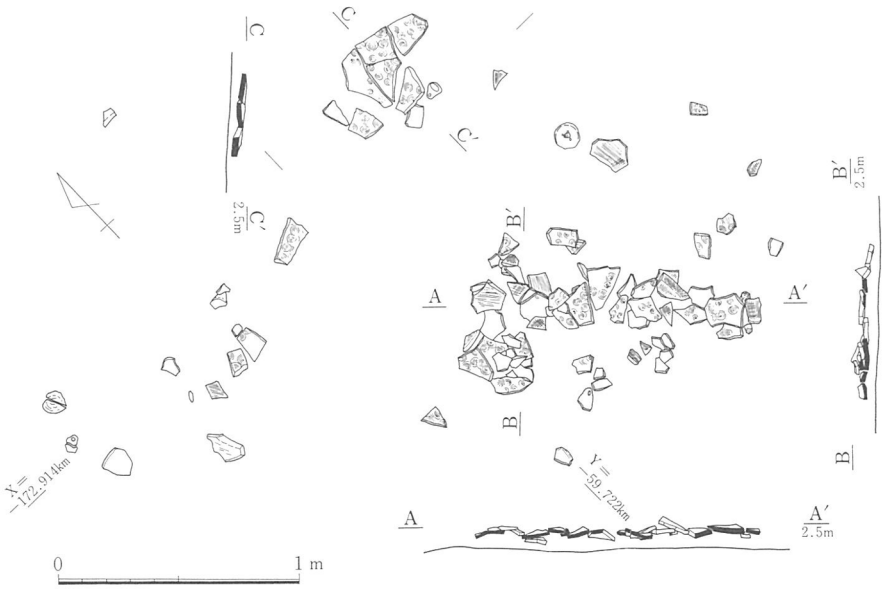
土器溜り

23－ＯＸ（第15～17図、図版５・10）

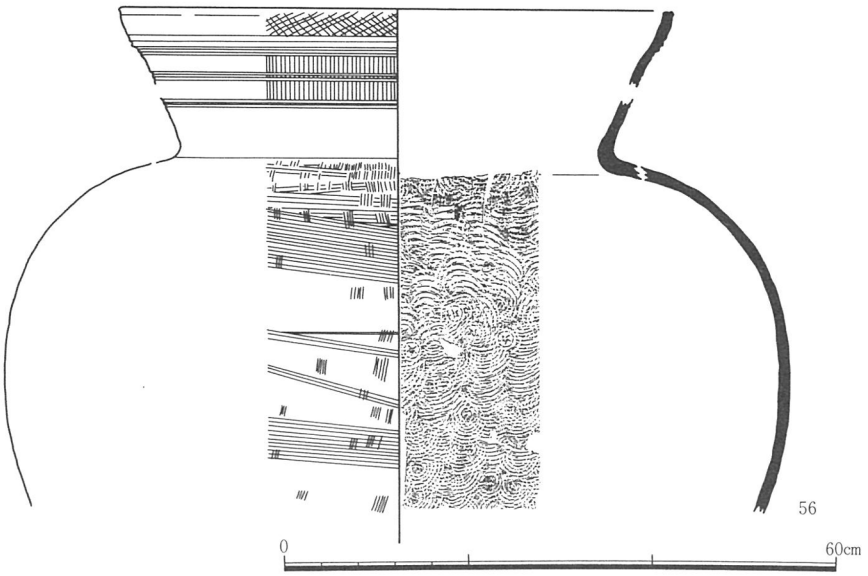
23－ＯＸは調査区中央Ａ23ＤＳ～ＤＴ区で検出された土器溜りである。１個体分の須恵器大甕を中心とした土器が密集していた。ベースとなる土層は拳大の礫を多量に含む黒褐色砂である。

土器は概ね、北東から南西にかけ、4.5m、南北2.0mの間に帯状に分布していた。土器の密集は大きく３群に分かれるが、何れも同一個体の須恵器甕を含む。礫層の間に土器が挟まった状態で検出された。明確な掘り込みのある遺構を確認したわけではないが、土器がこの地域に密集して散布しており、浅い遺構、もしくは自然の落込みがあった可能性が考えられる。

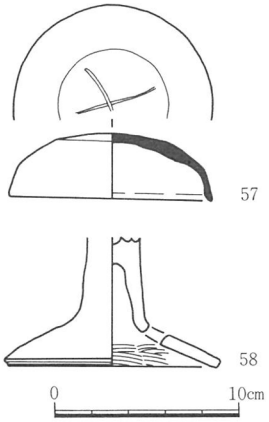
23－ＯＸから出土した遺物は、須恵器106片、土師器15片が出土しており、その大半を須恵器の大甕が占める。



第15図　23－ＯＸ平面図・立面図



第16図　23－ＯＸ出土遺物（１）



第17図　23－ＯＸ出土遺物（２）

56は須恵器の甕。口縁部と体部は直接接合しないが、想定復元した。口径は59.4㎝を測る。口縁部は少し外反し、端部は面を持って終わる。口縁部外面に斜格子状の文様帯が入る。頸部との境に断面三角形の沈線を巡らせ、２条の突帯を作り出す。頸部上半部に、縦方向の櫛書き文を施した後、２条一組の凹線を３カ所に施す。口縁部は回転ナデ調整が施され、頸部内面に指圧痕が残る。体部外面にはタタキの後、カキメ調整が施される。体部内面は同心円文の他、星形の車輪文が入る。良く焼き締まっている。

57は須恵器杯蓋である。口径は10.8㎝を測る。天井部と体部の境に明瞭な稜を持たない。口縁部は垂下し、口縁端部は丸く終わる。回転ナデ調整の後、天井部をヘラ切りする。良く焼き締まっている。天井部外面にはヘラ記号が認められる。

58は土師器高杯。中空の脚柱部を持ち、脚部は「ハ」の字状に広がる。脚部には外面より三カ所穿孔されている。脚部内面には横方向のハケメが入る。磨滅が激しいが、柱部には縦方向のナデ調整、脚部にはヨコ方向のナデ調整が施される。

土　壙

今回の調査では土壙が最も多く検出された。土壙検出総数は14個である。プランは円形（01－ＯＯ・05－ＯＯ・06－ＯＯ・09－ＯＯ・24－ＯＯ・27－ＯＯ・29－ＯＯ・34－ＯＯ）と楕円形（07－ＯＯ・08－ＯＯ・10－ＯＯ・30－ＯＯ・35－ＯＯ）、そして不定形（31－ＯＯ）のもので、砂を基盤とするため方形プランを持つものはなかった。規模は01－ＯＯ・30－ＯＯのようにそれぞれ最大径が3.64m、長軸が8.8mに及ぶものもあるが、その他のものは１m前後ないし未満のものである。埋土は粗砂（01－ＯＯ）、シルト（05－ＯＯ）・炭混じり黄色砂（06－ＯＯ・07－ＯＯ・08－ＯＯ・09－ＯＯ・10－ＯＯ・24－ＯＯ・27－ＯＯ・29－ＯＯ・30－ＯＯ・31－ＯＯ・34－ＯＯ・35－ＯＯ）、黄色砂（06－ＯＯ）の４種類が見られた。

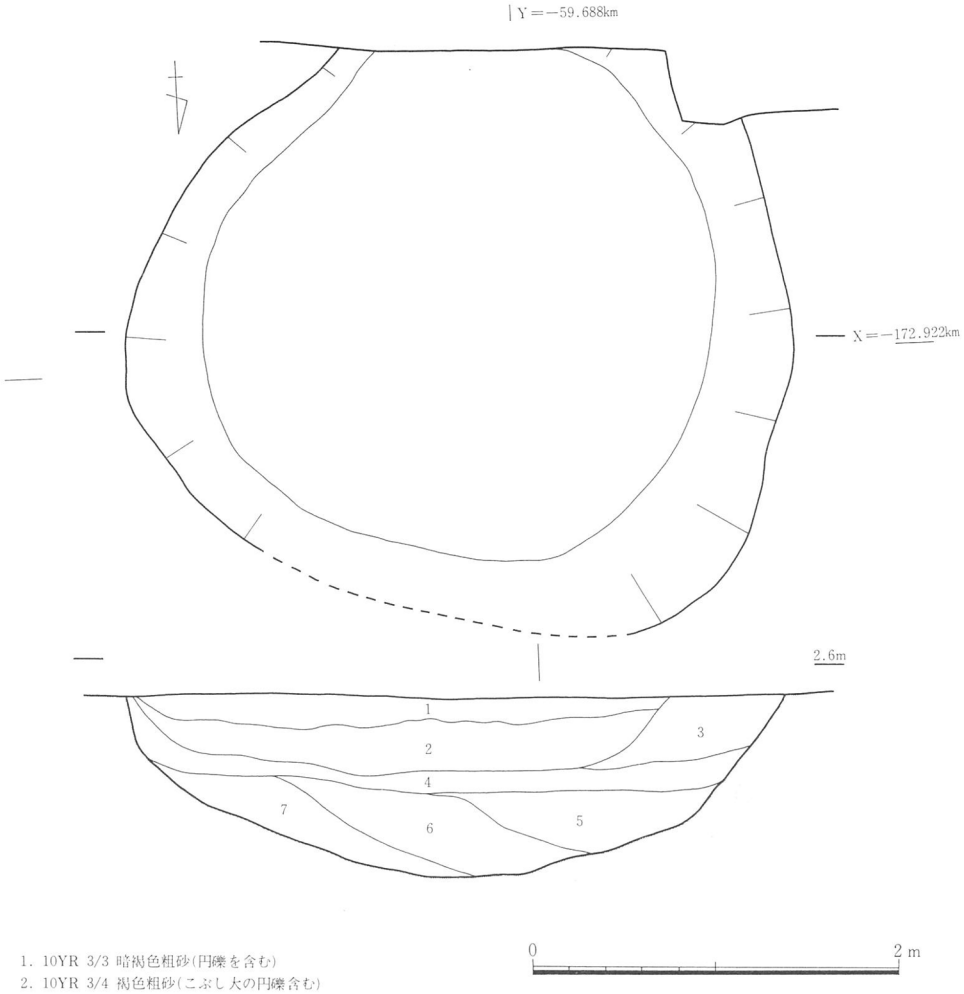
これらのことから、土壙を観察すると、埋土・規模が分類の大きな要素になると思われる。①埋土が粗砂で大型の01－ＯＯ、②埋土がシルトの05－ＯＯ、③埋土が黄色砂で中に拳大の石を多量に入れているもの06－ＯＯ、④埋土が炭混じり黄色砂で規模の大きい30－ＯＯ、⑤埋土が炭混じり黄色砂で、プランが正円に近く直径が0.7m前後あるもの（27－ＯＯ・29－ＯＯ）、⑥埋土が炭混じり黄色砂のもので規模が１m前後あるいは未満のもの（その他）に分けられる。これらのうちで、周辺の砂と同質のものを埋土としている④・⑥については出土遺物や堆積状況に恣意性は見られず、単なる廃棄土壙と思われる。しかし、他のものは今後、海岸集落を構成するものとしてどの様な機能をもっていたか検討する必要があろう。各土壙についてタイプ分けしたものの内、代表的なものについて記述してみたい。これらの遺構は出土遺物から総て古墳時代後期のものと考えられる。

01－ＯＯ（第18・22図71・73・74、図版11）

Ａ24ＦＣに位置する。ほぼ円形の土壙で、検出最大径3.64m、深さ1.0mの規模である。埋土は淘汰の進んでいない粗砂で、底には黒褐色のシルト層が薄く堆積していた。埋土内に炭・磨滅の激しい土器片等を含んでいた。土壙の最下層と検出面より約0.5m上に暗黒色のシルト層が薄く面を成していた。使用していた際、土壙の底が滞水した後、中程まで埋まり、もう一度滞水していた事が窺える。上層と下層の時期差は出土遺物からは明確にできなかった。

遺物は須恵器杯身・高杯・蛸壺、土師器高杯等が出土している。この内、図化できたものは、須恵器杯身１、須恵器蛸壺２である。

須恵器杯身は71が口径7.9㎝と小さなもので、受け部が外方に長く突き出している。



1. 10YR 3/3 暗褐色粗砂(円礫を含む)
2. 10YR 3/4 褐色粗砂(こぶし大の円礫含む)
3. 10YR 4/3 にぶい黄褐色粗砂
4. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色中砂～粗砂(下層にシルトを含む)
5. 10YR 3/2 黒褐色シルト混じり中砂～粗砂
6. 10YR 5/3 にぶい黄褐色中砂～粗砂
7. 10YR 3/2 黒褐色シルト混じり中砂～粗砂

第18図　01－ＯＯ平面図・断面図

73の蛸壺は大型のもので須恵質、74は釣鐘形の蛸壺である。土師器は細片のため図化できなかった。

05－ＯＯ（第19・22図76、図版６・11）

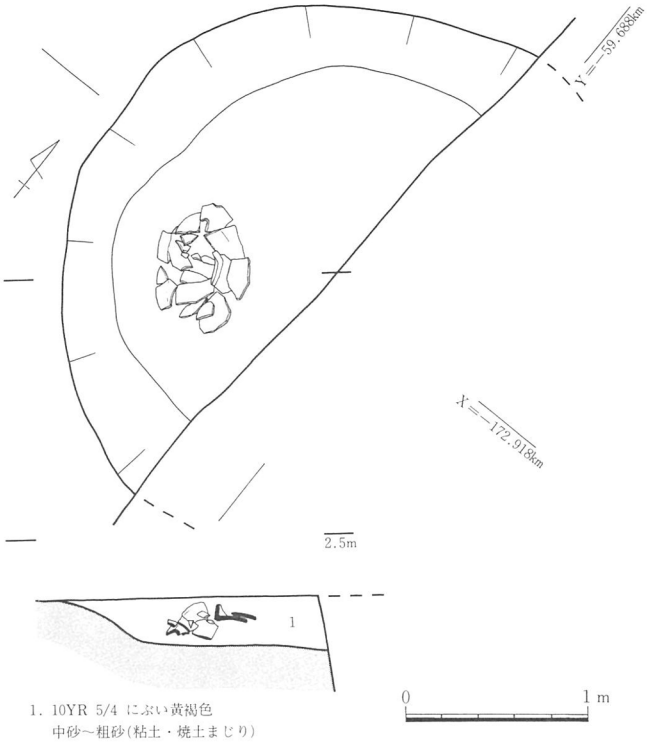
Ａ24ＥＢに位置する。円形プランを持つ土壌で直径0.7m、深さ0.4mを測る。埋土はシルト混じりの黄色砂で炭・焼土を斑状に含んでいた。土壙の底に土師器甕１個体を置いていた。76の土師器甕は口縁内部にハケメ調整を施し、胴部内面をヘラケズリしている。

06－ＯＯ（第20図、図版６）

Ａ24ＤＶに位置する。円形プランで直径0.5m、深さ0.15mの規模である。中には拳大の石が多量に入っていた。遺物は出土しなかった。

10－ＯＯ（第20・22図72・75、図版10）

Ａ24ＦＢに位置する。楕円形で長軸1.14m、短軸0.85m、深さ0.2mを測る。埋土は炭混じり黄色砂である。須恵器杯身・須恵器蛸壷・土師器甕の細片が出土している。



第19図　05－ＯＯ平面図・断面図

72は口径11.6㎝、器高3.8㎝で底部を回転ヘラ切りする。立ち上がりは退化している。

24－ＯＯ（第20図）

Ａ23ＥＷに位置する。楕円形で長軸1.14m、短軸0.85m、深さ0.2mを測る。埋土は炭混じり黄色砂で、須恵器杯身・土師器甕の細片が出土した。

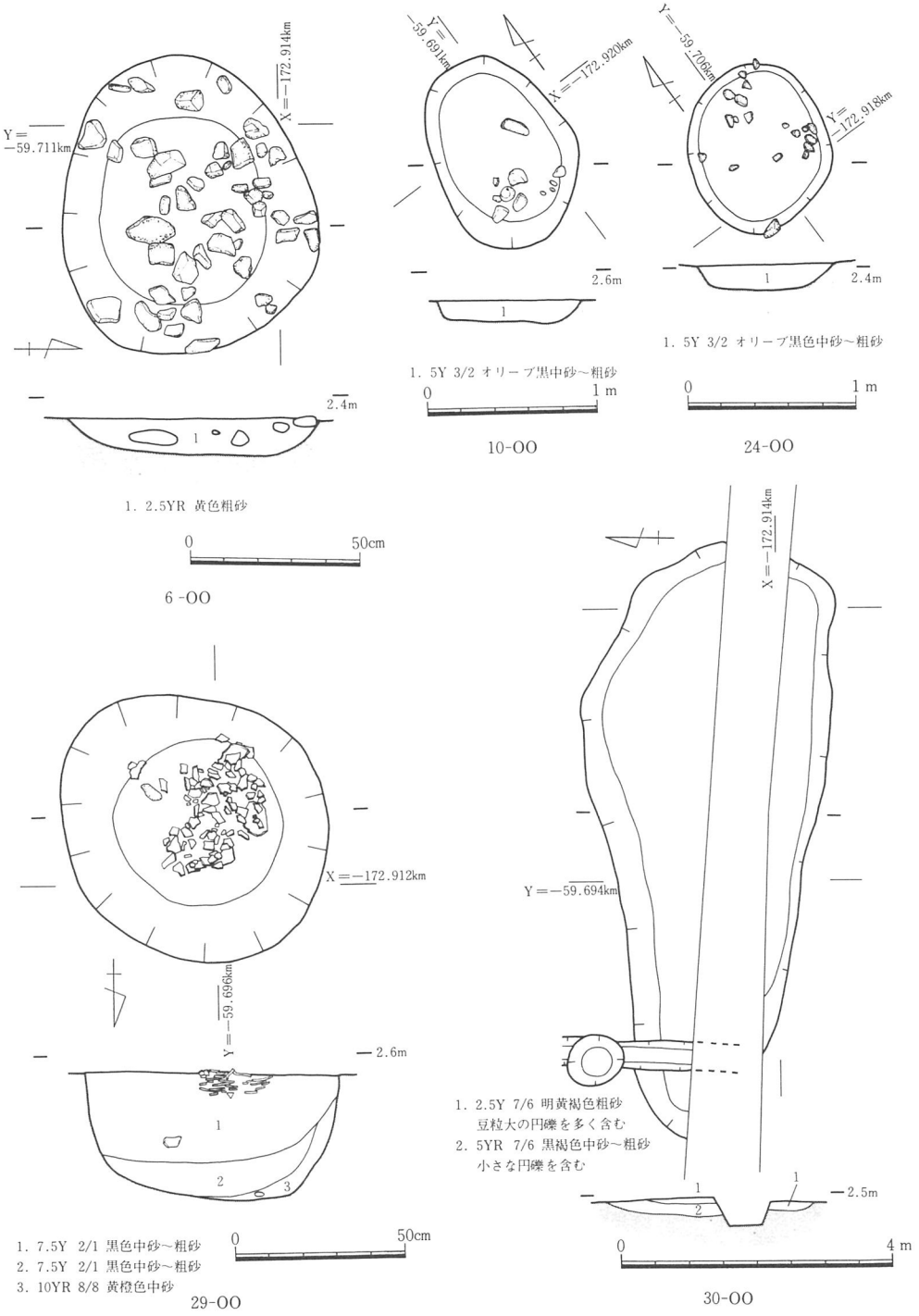
29－ＯＯ（第20・22図82、図版11）

Ａ23ＣＹに位置する。正円形に近いプランで径0.7m、深さ0.45mの規模である。埋土は炭混じり黄色砂である。土師器甕１個体（82）を図化した。

30－ＯＯ（第20・22図77～81）

Ａ24ＤＣに位置する。南北に細長い不定形のものである。大きさは最大長8.8m、短軸3.6m、深さ0.3mを測る大型のものである。埋土は炭混じり黄色砂である。出土遺物には須恵器杯身・提瓶・瑤・甕・蛸壺・土師器の細片がある。

77の須恵器杯身は口径11.3㎝、残存高3.9㎝である。立ち上がりが直立し内面の凹線を持つので６世紀初めに位置づけできよう。78・79は土師器の甕である。78は口径17.0㎝、



第20図　06・10・24・29・30－ＯＯ平面図・断面図

残存高7.8㎝で口縁は短く「ハ」の字状に広がる。79は口径11.6㎝、残存高3.9㎝で口縁は外反し、口縁端は丸く納まる。80・81は蛸壺である。80は須恵器の釣鐘形のもの、81は大型の真蛸壺である。

奈良～平安時代の遺構

奈良～平安時代の遺構は柱穴がある。これらの遺構は黒褐色土の上層で検出されたものだが、いくつかは古墳時代のピットも含まれると考えられる。時期が明確につかめないことから今回は一括して奈良～平安時代として扱うことにした。

柱穴

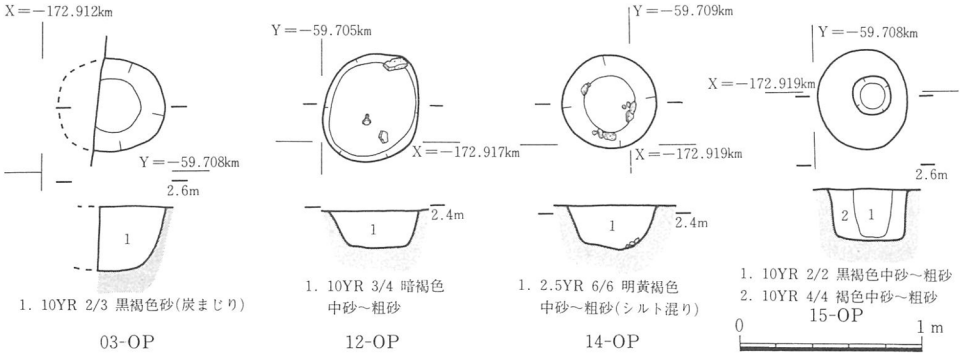
柱穴は直径0.3m～0.5m前後の規模の柱穴が出土した。柱穴出土個数は12個である。柱材の残るものはないが、15－ＯＰで柱根が確認できた。埋土は炭混じりの黄色砂、シルト（15－ＯＰ）の２種類が見られた。しかし、建物の並びを復元できるようなものはなかった。これらの柱穴は調査区北東に集中して検出されている。この柱穴群はさらに東側に広がると思われる。奈良～平安時代の遺構の広がりは調査区の北東側に続くと思われる。

03－ＯＰ（第21図）

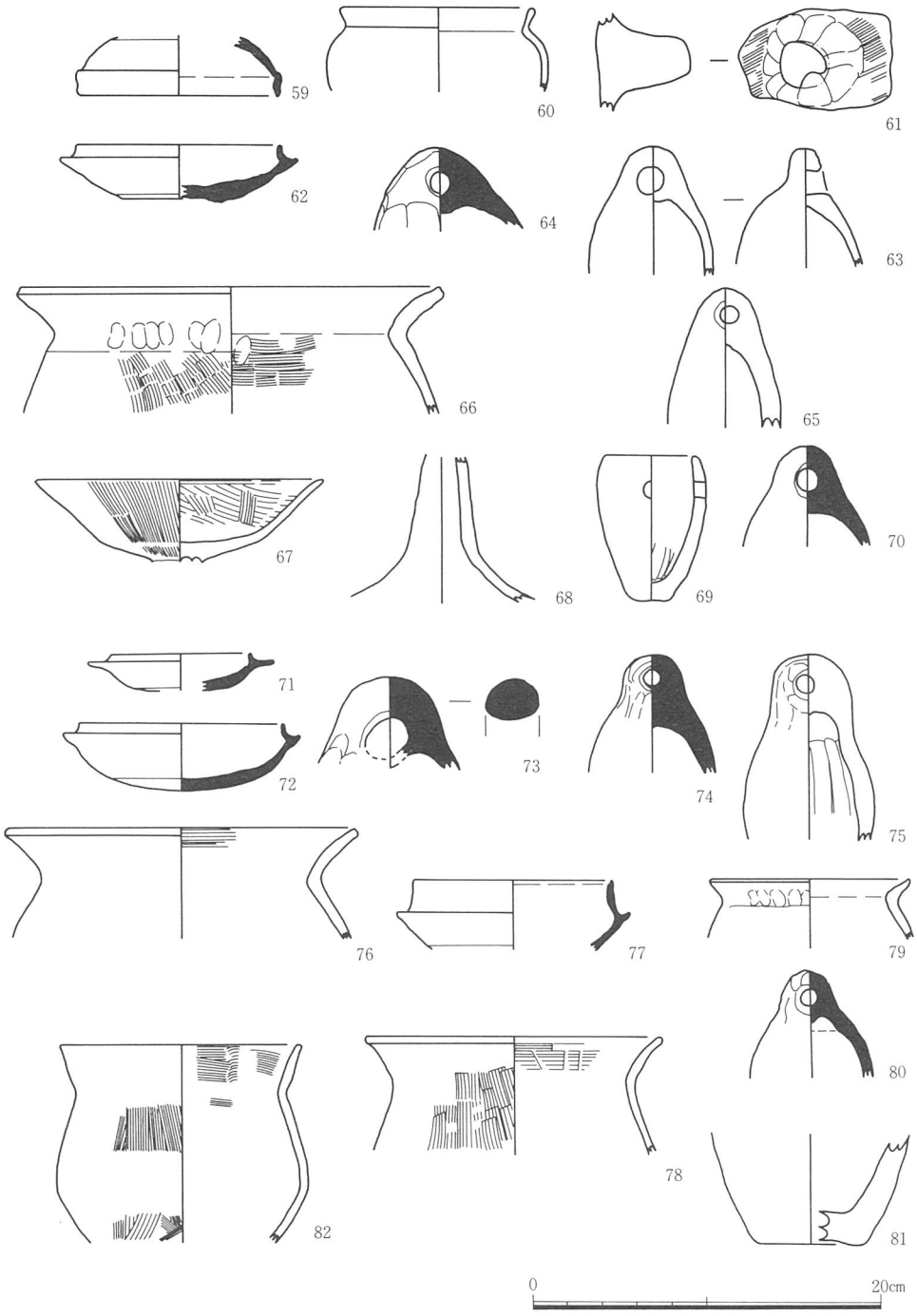
Ａ23ＣＵに位置する。径0.8m、検出面からの深さ0.4mのものである。22－ＯＤに切り込んで検出され、埋土は炭混じり砂である。須恵器甕、土師器杯・甕の細片を出土した。

12－ＯＰ（第21・22図59）

Ａ23ＥＷに位置する。最大径0.63m、深さ0.2mである。埋土は前述のように炭混じり黒褐色砂である。掘方と柱根の痕跡は明確に出来ないが、須恵器杯身・蛸壺・甕、土師器杯を出土した。



第21図　柱穴平面図・断面図



第22図　柱穴・溝・土壙出土遺物

図示したもの（59）は、須恵器杯蓋である。口縁径11.3㎝、残存高3.35㎝である。内外面をヨコナデ調整する。

13－ＯＰ（第22図60・61、図版11）

Ａ23ＥＶに位置する。最大径0.52m、深さ0.23mである。埋土は黒褐色砂である。出土遺物は須恵器壺（60）と土師器の把手（61）がある。

15－ＯＰ（第21図）

Ａ23ＥＶに位置する。掘方の最大径0.54m、深さ0.28mで柱根は径0.2mである。埋土は前述のようにシルトで、柱根の部分はやや暗色である。

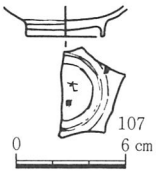
第４節　包含層の遺物

今回の調査では弥生時代後期～近世にわたる遺物群を出土した。これらの遺物は第１層から第６－Ｉ層の間で出土したものである。出土総破片数8418点、このうち、古墳時代前期のもの374点、古墳時代後期のもの6185点である。そして、古墳時代後期の内、須恵器は2813点、土師器は3372点であった。出土遺物には甕片が多量に混じっているためこれを除いて数えると、須恵器2303点、土師器2568点で、遺物の比率はやや土師器が多い傾向があった。古墳時代後期に遺物が集中することは、遺構のほとんどが後期であることと符合し、土師器と須恵器の比率も前回の調査にほぼ等しいものであった。

遺物包含層は次の順序で堆積していた。近現代に属する耕作土・床土・上層混礫土層－第１・２層、中世包含層である暗褐色土層－第３層、奈良・平安時代の包含層である褐色土層－第４層、古墳時代を主とし上層に奈良・平安時代の遺物を含む黒褐色砂層－第５層、古墳時代の遺物を含む黄色砂層－第６－Ｉ層である。これより下層は前述の通り無遺物であった。調査時点では第５層と第６－Ｉ層の間に時間差があると考え、黒褐色砂と黄色砂を色の違いで分けて遺物の取り上げを行った。

第６－Ｉ層の黄色砂を調査したのは、第５図Ａ・Ｂの部分及び中央の深掘りした部分に限られる。したがって、第６－Ｉ層の確認範囲は、調査区全体（約1000㎡）の内の約30％にすぎない。第６－Ｉ層の遺物の少なさは調査面積にも関係すると考えられる。また、黒褐色砂は層の厚さが平均して40㎝近くあり、１時期の堆積とは考えられない。ある時間をおいて堆積したことは確かであるが、出土遺物からみて、この時間幅が古墳時代前期～古墳時代後期・奈良～平安時代に相当すると思われる。この砂の層は人の移動や自然の波や

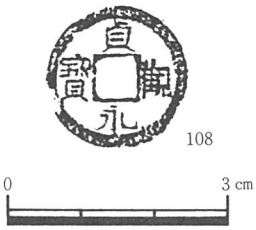
風によってさえ、時々刻々とその形が変わる状態であり、また、遺物が踏まれ下層にめり込む可能性も十分にあって、遺物が上下することがあったと思われる。下層の黄色砂のレベルで取り上げた遺物内に奈良・平安時代の遺物が含まれたり、黒褐色上層に古墳時代後期の遺物が入ったり、堆積状況は安定したものではなかった。



第23図　第1・2層出土遺物

遺構が検出されたのは黒褐色砂中で、柱穴は比較的上層の方に集中していた。他の遺構は層の中程から検出されている。前述の様に黒褐色土を何回かに分けて検出しているが、奈良時代以降の遺構・遺物が僅少なため、遺物出土の事実以外何らかの傾向を把握するには到らなかった。

以下、包含層の遺物を、①第１・２層、②第３層、③第４層、④第５層、⑤第６層－Ⅰに分けて記述する。



第24図　貞観永寶拓影

①第１・２層（第23図）

染付椀１点（107）を図化した。細片のため口径など法量は不明である。やや発色の悪いものである。時期は近世と考えられる。

②第３層

この層からは瓦器椀・白磁片等の細片が出土しているが、少量で細片が多い。図化に耐えられるものはなかった。

③第４層（第24・25図、図版11・12）

奈良・平安時代に堆積、あるいは客土された土層である。奈良時代の杯身・擂鉢、平安時代の黒色土器、皇朝十二銭の一つ「貞觀永寶」が４枚出土している。

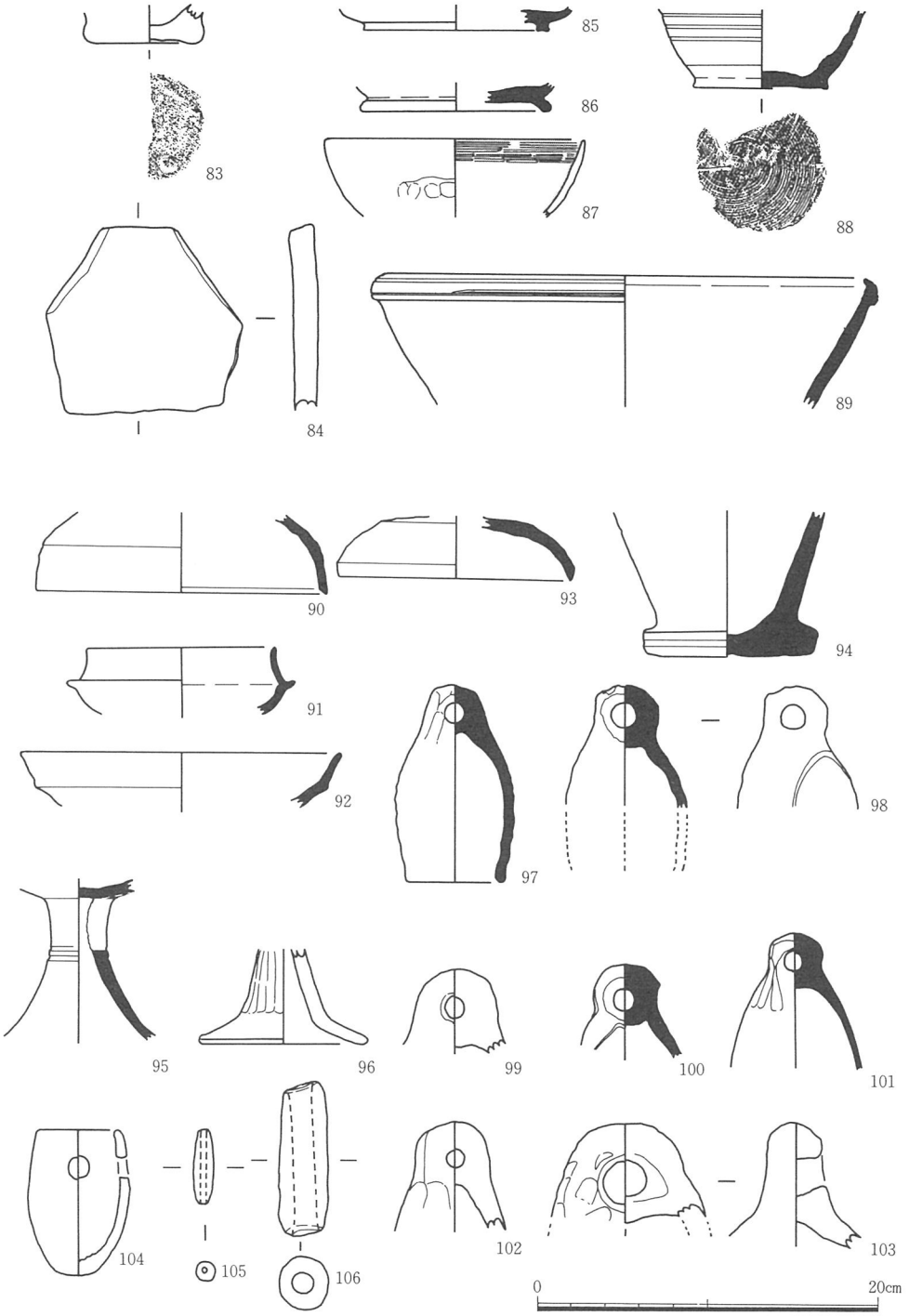
この他、古墳時代の須恵器杯身・蓋・高杯・蛸壺、土師器高杯・蛸壺・土錘が出土している。

縄文時代

縄文土器の鉢底部片（83）が出土した。底径10.7㎝である。

古墳時代

104の飯蛸壺を除いて、すべてが古墳時代後期のものである。図化に耐えうるものは16



第25図　第４層出土遺物

点であった。

90の須恵器杯身は口縁部の立ち上がりが高い。90は口径10.8㎝、杯蓋は2点出土した。93は口径13.4㎝を測る。高杯（92・95）は、92が杯身片で口径18.5㎝、残存高3.1㎝である。胴部中位に稜を持つ無蓋高杯である。95は脚部片である。残存高9.2㎝で2段透かしを施し、脚柱部中程に2条の凹線を持つ。

蛸壺は釣鐘形の飯蛸壺が出土した。このうち4点（97・98・100・101）を掲載した。完形品は97の一点のみで、口径5.2㎝、器高11.6㎝である。胴部はやや湾曲しながら口縁部に到るもので、ロクロの水挽き痕を明瞭に残す。98は紐部直下にヘラ記号を残す。

96は土師器高杯の脚部片である。底径9.5㎝、残存高5.4㎝である。104はコップ型の飯蛸壺である。Ⅲａ類に属するものである。口径4.6㎝、器高8.4㎝である。内外面はナデで仕上げている。105と106は管状土錘である。105は長さ4.35㎝、幅1.1㎝で、106は長さ8.9㎝、幅2.2㎝である。他に、古墳時代後期の蛸壺が3点（99・102・103）出土している。99・102は釣鐘形の飯蛸壺、103は釣鐘形の真蛸壺である。

奈良・平安時代

奈良時代の杯身（85・86）は底部の破片で、杯Ｂタイプのものである。高台径10.6㎝～10.7㎝で、高台断面は四角形を呈する。94の擂鉢は底径6.7㎝、残存高8.4㎝で、底部に穿孔は見られない。

平安時代の黒色土器（87）は口径15.0㎝、で内黒タイプのものである。

88は底部糸切り底のもので小型の壺である。

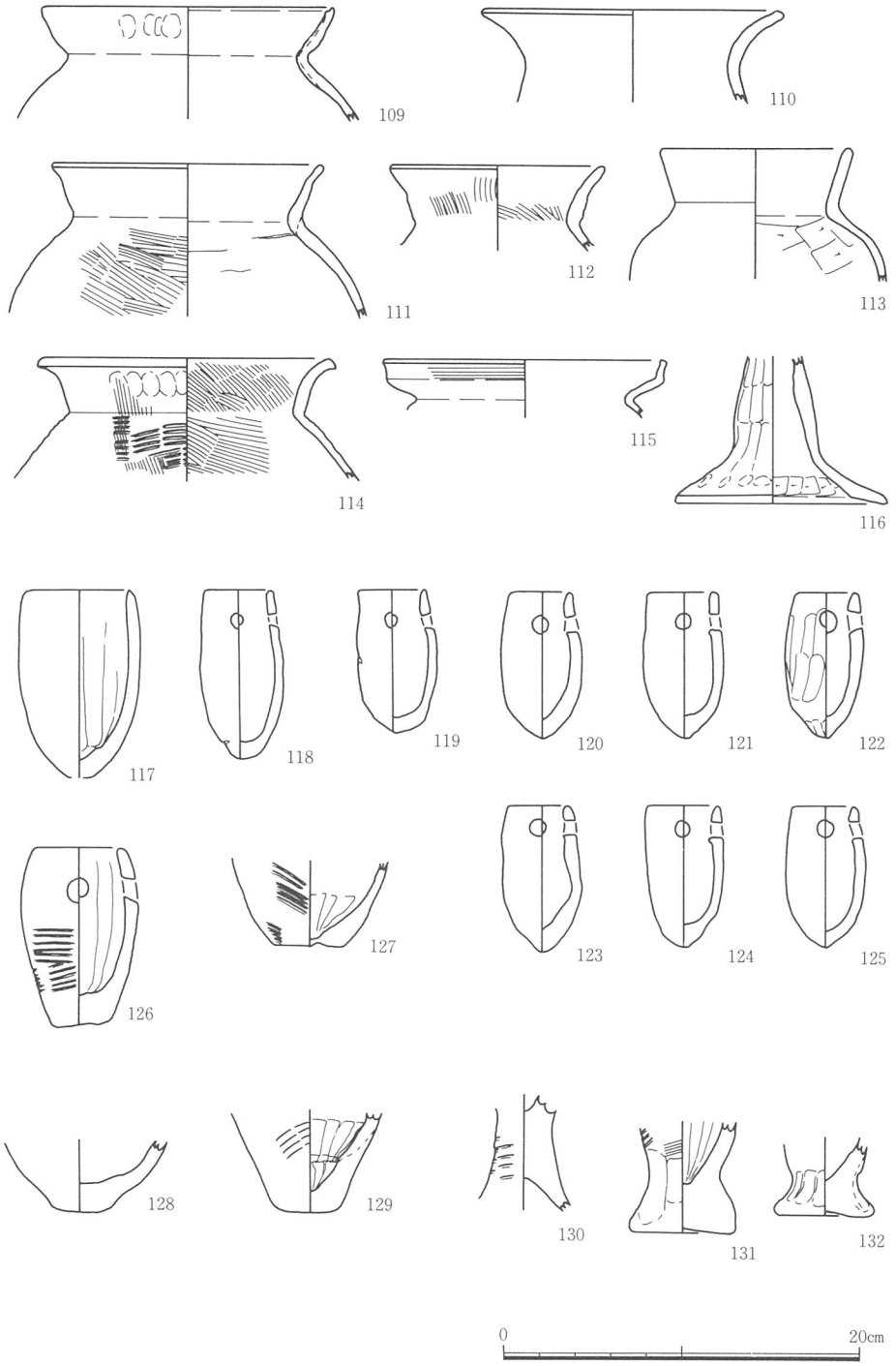
他に平安時代のものは、皇朝十二銭の一つ「貞觀永寶」が4枚ある。このうち残りの良い1点（108）の拓本を掲載した。出土したものは、直径1.92～2.00㎝、厚さ0.6～0.7㎝を測る。初鋳年が870年（貞觀元年）で9世紀の終わり頃に位置づけられ、黒色土器の年代と同じと考えられる。

中世

捏鉢・甕・瓦片がある。89の捏鉢は口径28.0㎝、残存高7.5㎝を測る。瓦は3点出土しているがその内1点（84）を図化した。84は平瓦片である。内面に布目痕を残す。

④第5層（第26～28図、図版12～15）

大半の遺物がここからの出土である。図版を見ても分かるように古墳時代後期のものが集中的に出土している。奈良時代の杯身・瓦片も出土しているが褐色土層の直下から出土



第26図　第５層出土遺物（１）

したもので褐色土層形成直前に投棄された遺物と考えられる。

弥生時代後期

壺が３点（110・111・114）出土している。110は口径16.3㎝、残存高5.2㎝を測り、口縁を「ハ」の字形に外反させて端部を丸く納めるものである。114は口径15.8㎝、残存高6.5㎝を測る。

古墳時代前期

図示したものは21点で、すべて土師器である。

甕は４点（109・112・113・115）図化できた。109は口径16.2㎝である。112は口径11.8㎝、残存高4.7㎝である。外面はハケメ調整を施す。113は口径10.4㎝、器高7.3㎝を測る。内面をヘラケズリ調整で仕上げるものである。115は口径15.6㎝、残存高3.1㎝を測り、外面にはタタキ痕跡を残し、内面はハケメ調整で仕上げている。

116の高杯は底径11.4㎝、残存高8.2㎝を測る。

蛸壺は13個体を図示した。117～125は外面をナデ調整するもので、今回の調査で最も多く出土したタイプである。口径3.6～5.6㎝、器高6.1～10.4㎝を測るものである。比較的小型のもので底部は尖るタイプである。117は内面に縦方向のナデ痕跡が明瞭に残るもので、口径5.6㎝、器高10.4㎝を測る。126は口径4.6㎝、器高9.9㎝を測り、外面にタタキ痕跡を残すもので、底部が平底になるものである。以上はコップ型の飯蛸壺で前者がⅣａ類、後者がⅠｂ類にあたると思われる。

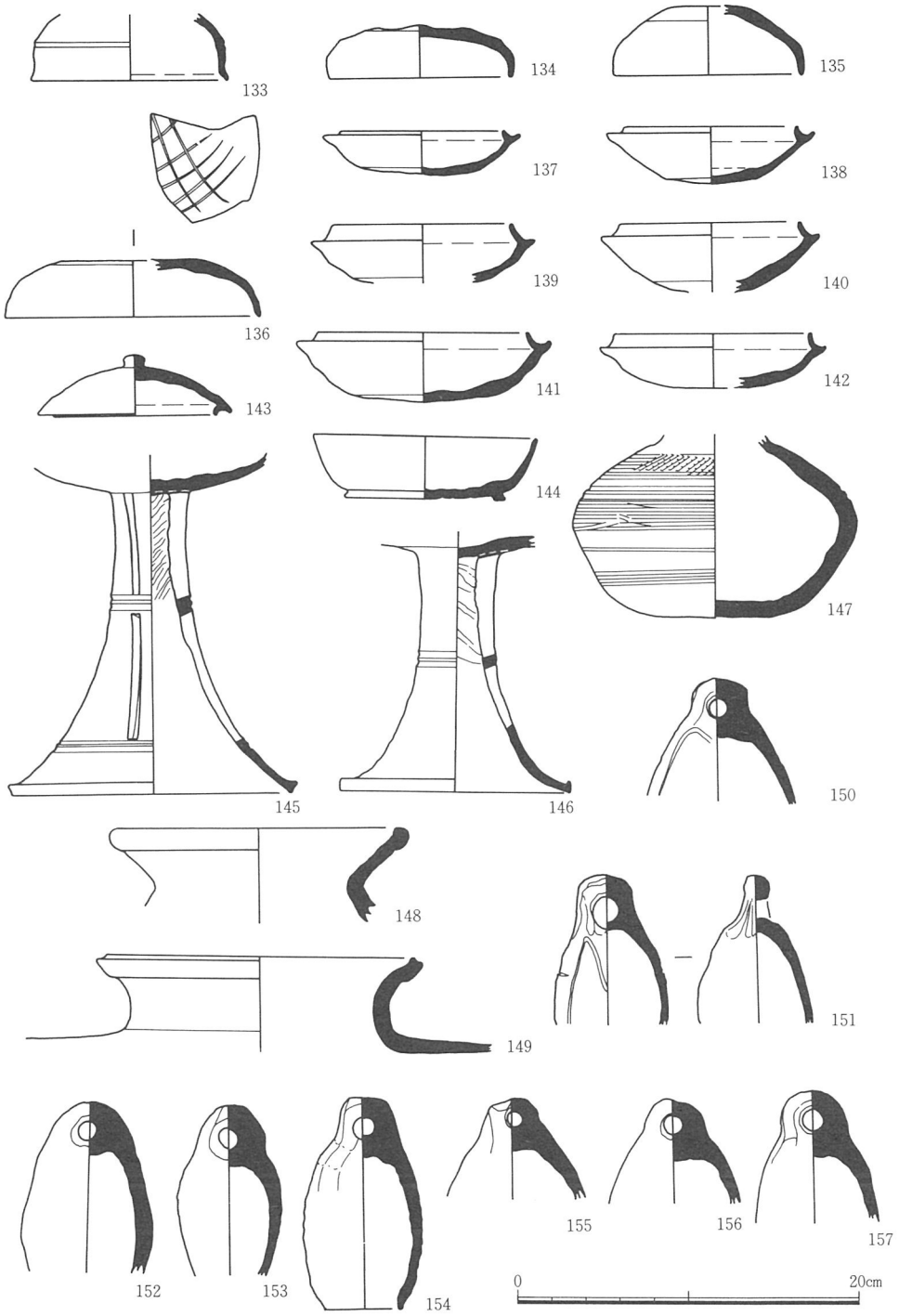
127～129は真蛸壺になるものの底部であろう。いずれも胴部がやや開き気味のものである。127と129では内面底部に縦方向のナデ痕跡、外面にタタキ痕跡をそれぞれ観察することができる。

製塩土器は３点（130～132）図示した。130は残存高6.3㎝の脚台Ⅰ式である。131と132は脚台Ⅱ式で、131は残存高6.2㎝で外面にタタキ痕跡を残す。132は残存高4.3㎝である。

古墳時代後期

今回の遺物の大半を占める層である。須恵器杯身・杯蓋・高杯・壺・甕・甑・蛸壺、土師器杯身・高杯・壺・甕・鉢・甑・竈・土錘・製塩土器・蛸壺が出土した。

須恵器杯蓋は、５点（133～136・143）を図示した。133は基底部と天井部の境に稜を残し、口縁端部を外方につまみ出すものである。基底部11.4㎝、残存高3.8㎝を測る。外面頂部にヘラ記号を残す。134・135・136は稜が退化し、口縁端部を丸く納めるものである。基底部10.4～14.8㎝である。143は天井部に宝珠つまみが付き口縁端部にかえりの見られ



第27図　第５層出土遺物（２）

るものである。133はやや古く6世紀前半に、143は7世紀に入るものと思われる。基底部9.4㎝、残存高3.5㎝である。

須恵器杯身（137～142）は口径9.2～13.4㎝、器高2.6～4.0㎝である。すべて外面底部ヘラ切り未調整で、立ち上がりも退化している。

高杯は2点（145・146）図化できた。いずれも長脚のものである。145は残存高18.9㎝で丁寧な作りのものである。脚部に三方向の二段透かしが施され、透かしの境に2条の凹線を持つ。脚部内面の上方には右上がりの絞り目を観察できる。146は残存高14.8㎝で透かしは施されていないが、中程に2条の凹線を施している。

147の壺は残存高10.5㎝、底部径6.2㎝である。肩部及び胴部上半にカキメ、肩部と胴部の境に2条の凹線を施している。胴部下半にも部分的にカキメを施している。肩部の上方には右上がりの斜め方向にカキメを施している。

甕は2点（148・149）図示した。148は口径16.6㎝、残存高5.4㎝である。頸部から外方へ直線的に突き出し口縁を丸く玉縁にして終わるものである。149は口径17.8㎝、残存高5.5㎝を測るもので、やはり口縁部は外反しながら立ち上がるものである。端部はさらに外方へ弯曲させる。口縁端は面を持つ。

蛸壺は8点（150～157）を図示した。すべて釣鐘形の飯蛸壺である。
150と151にはヘラ記号が入る。完形の155で高さ12.5㎝、口径5.0㎝、紐穴径1.1㎝である。

158の土師器杯は口径16.6㎝、器高3.8㎝である。底部外面をヘラケズリし内面及び外面上半分をヨコナデしている。

159の製塩土器は口径7.6㎝、残存高3.5㎝である。内面にハケメ調整を施す。

160は把手である。161は鍋である。口径3.7㎝、残存向8.9㎝である。外面胴部に縦方向のハケメを入れ下部に不定方向の粗いハケメを施している。

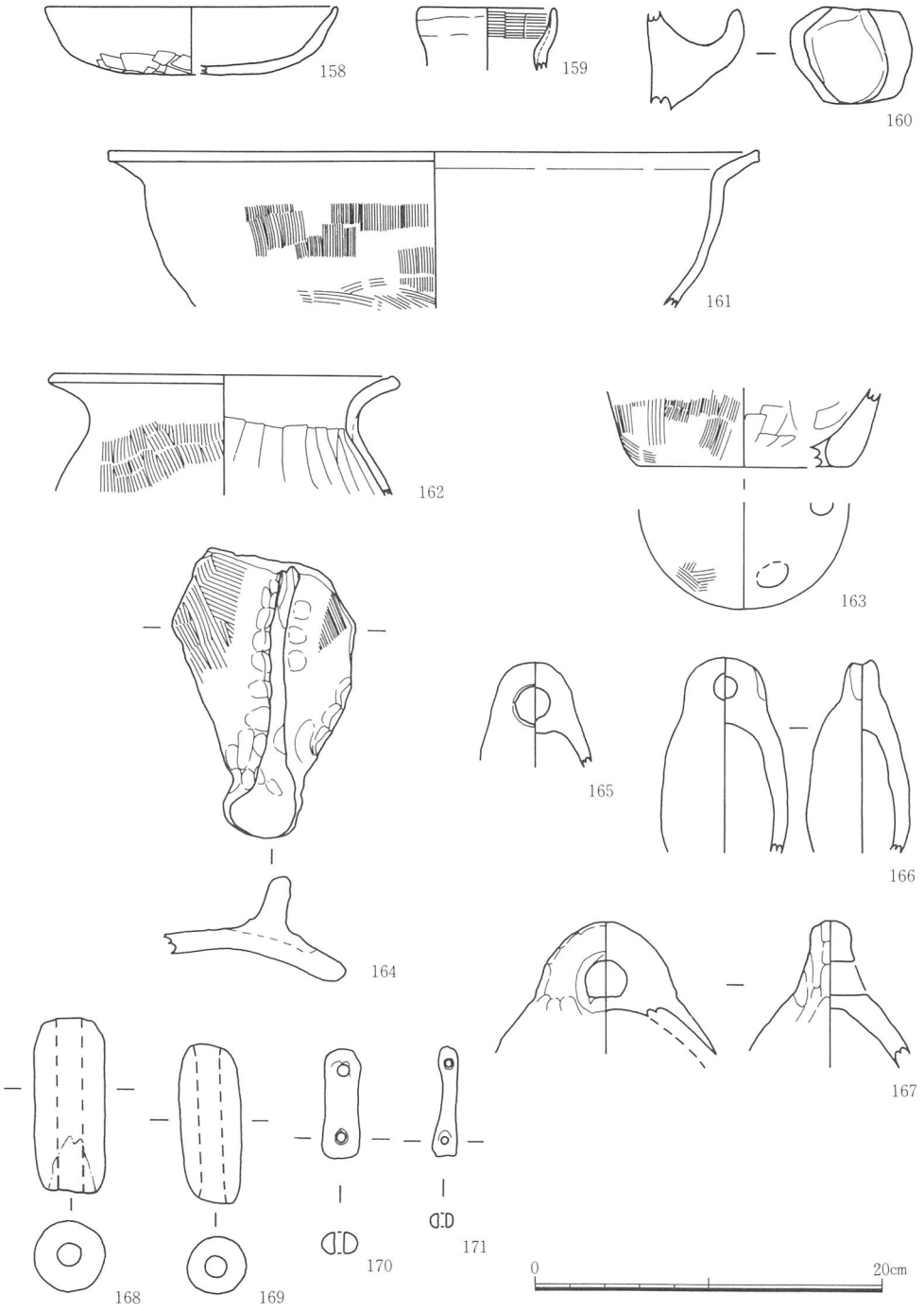
162の甕は口径19.4㎝、残存高6.8㎝を測る。外方へ開くタイプのもので外面をハケメ、内面をケズリ調整している。

163は甑の底部片で、底径12.0㎝、残存高4.5㎝を測る。外面をハケメ、内面を不定方向のケズリで仕上げている。底部に楕円形の穿孔が見られる。

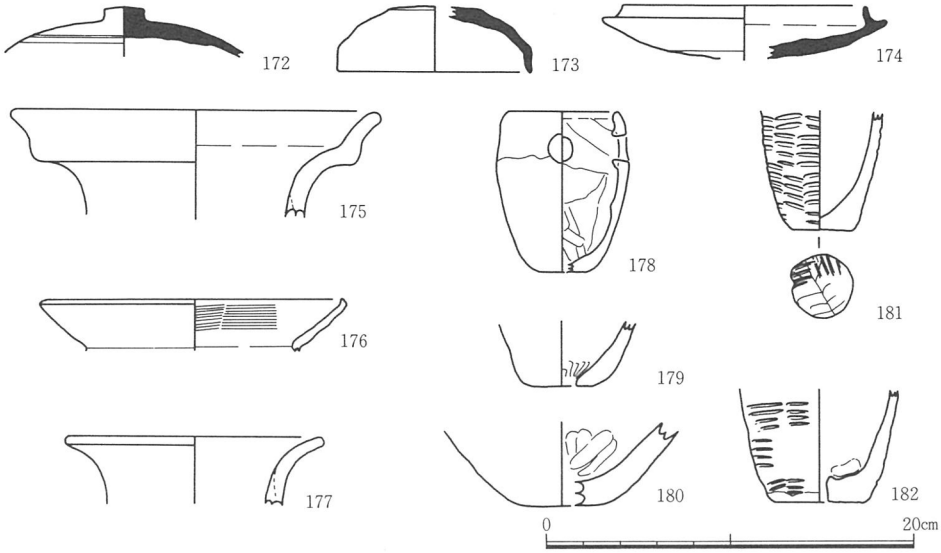
164の竈は、炊口部の鍔の破片である。手づくねで鍔を接合した後、ナデで周辺を仕上げている。胴側は不定方向のハケメ調整で仕上げている。

165～167の蛸壺は釣鐘形のもので、167は真蛸壺、165・166は飯蛸壺である。

168～171は土錘である。168と169が管状土錘である。168は長さ10.0㎝、幅4.1㎝、169



第28図　第５層出土遺物（３）



第29図　第６－Ⅰ層出土遺物

は長さ9.1㎝、幅3.5㎝である。170と171は有孔土錘である。170は長さ6.2㎝、幅2.2㎝、171は長さ6.3㎝、幅0.8㎝である。

⑤第６－Ⅰ層（第29図、図版13・15）

出土遺物は、須恵器杯蓋・杯身・高杯の蓋、土師器壺・甕・高杯がある。

172の高杯の蓋はつまみの付いたものである。

173の須恵器杯蓋は稜が退化しており、口径10.3㎝、残存高3.5㎝である。

174の杯身は口径13.0㎝、残存高2.8㎝である。

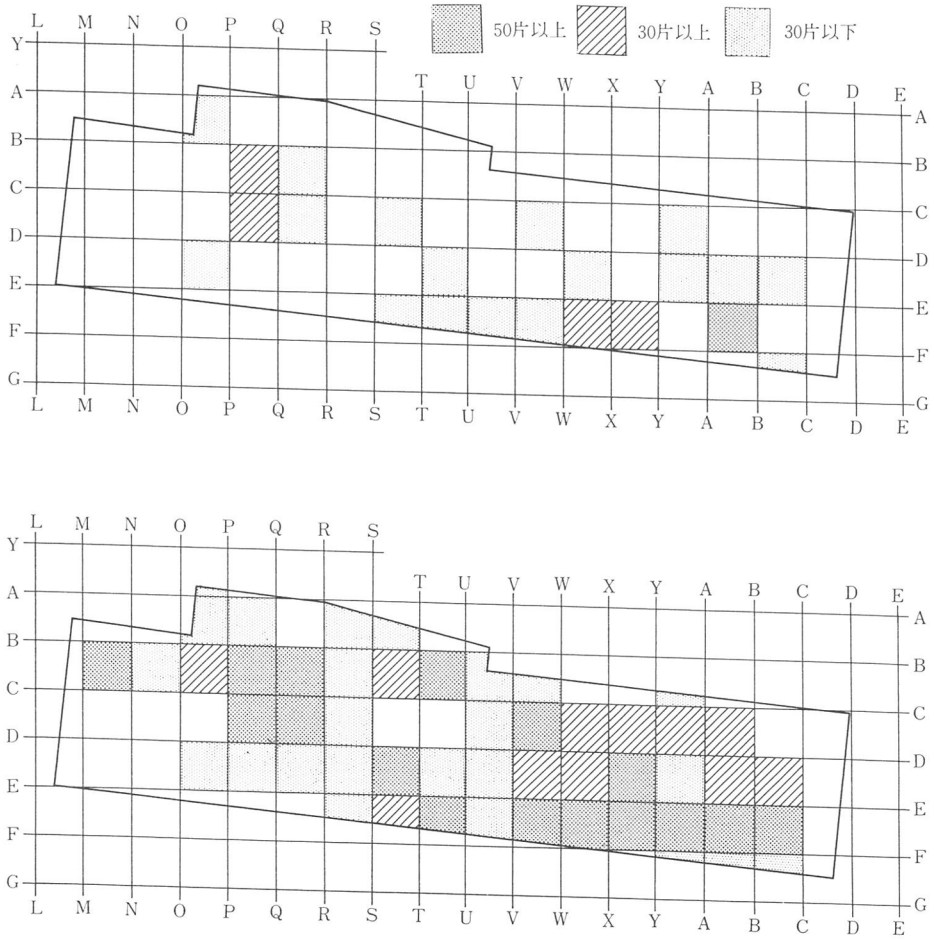
175の土師器壺は二重口縁のもので、口径19.4㎝、残存高5.6㎝を測る。

甕は２個体（176・177）ある。176は口縁部の破片で、口径16.0㎝、残存高2.7㎝である。177も口縁部の破片で、口径13.6㎝である。

蛸壺は５個体（178～182）を図示した。178はⅢａ類で内外面をナデ調整している。口径5.8㎝、器高8.6㎝を測る。181は残存高6.3㎝を測り、外面にタタキ痕跡を残すもので、底部が平底になるⅠｂ類のものである。さらに底部には木葉痕を残す。179・180・182は底部片である。何れも底部が平底のもので、180は大きく斜め上に胴部が延びるタイプである。182は外面にタタキ痕跡を残し、焼成前の穿孔が認められる。

以上、古墳時代のものは大きく前期と後期の遺物に分けられ、５世紀代～６世紀中頃までの遺物は若干の例外を除いて出土していない。古墳時代後期のものは、須恵器杯身・杯蓋・高杯・壺・甕・蛸壺、土師器杯身・甑・鍋・竈・蛸壺・土錘などである。時期は須恵器杯身の外面底部ケズリの省略、退化。土師器杯の存在・高杯の二段三方透かしが見られることなどから、６世紀末～７世紀に入る遺物が大半を占めると考えられる。前期のものは甕・高杯・蛸壺・製塩土器があるが全体に遺物量は少ない。

蛸壺はコップ型の飯蛸壺と真蛸壺の底部片が出土した。コップ型のものではⅣａ類が大部分を占め、Ⅲａ類・Ⅰｂ類が若干出土している。前回の調査ではⅢａ類の比率が高い。これと異なった結果となった。底部を穿孔したものは第６－Ⅰ層に２点見られた。真蛸壺



第30図　古墳時代遺物出土分布図

はいずれも底部片で全体を観察できるものは無かった。

前期～後期を通じての傾向を見ると、前期は蛸壺・製塩土器とも出土しているが、後期に入ると製塩土器の出土が見られない。また、蛸壺はコップ型のものから釣鐘形に変化している。前回までの調査ではこれらの漁撈具や製塩土器が遺物中に占める割合は半数以上にのぼっている。しかし、今回は全体の２～３割にとどまり、これまでの調査よりやや低い。集落ということで生産用具より生活品の割合が多いのだろうか。

調査区内での遺物出土傾向を表にしたのが第30図である。まず第30図上は第５・６－Ⅰ層の古墳時代前期の分布図である。前期の遺物は出土点数が少ないため、疎らに検出されたのみであるが調査区全体に分布していた。第30図下は古墳時代後期の遺物出土分布図である。後期は遺構もかなり検出され、この地区の中心であるため土師器が多い。遺物分布は①ＶＥ～ＢＥにかけてと、②ＰＢ・ＱＢ・ＰＣ・ＱＣ、それと③26－ＯＤの検出された地区にやや集中している傾向がある。①は土壙が集中して検出された地区で、②・③はそれぞれ、遺構の検出された地区にあたっている。全体的な粗密は、調査区南西に遺物の出土集中点が見られ、遺跡本体の広がりは南西にさらに広がる可能性を考えることが出来る。

註

(1) 蛸壺の分類は、前掲書「脇浜遺跡発掘調査報告書」・「脇浜遺跡発掘調査報告書Ⅱ」によった。

(2) 製塩土器の分類は前掲書「脇浜遺跡発掘調査報告書」によった。

第５節　小　結

今回の調査では古墳時代後期を中心とする遺構遺物を多量に検出し、多くの成果を得ることができた。特にこれまでの調査に比べ古墳時代後期の遺構群は見るべきものがあった。これらを踏まえて、脇浜遺跡の性格と今後の問題点について少し触れてみたい。

1985年以来、当協会では脇浜遺跡の調査を４次にわたって行ってきた。その結果、近木川北岸の洪積段丘上から海岸部にわたる広大な脇浜遺跡の様相が明確になった。

Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区が1985年度調査のその１[1]、Ⅳ－１区が1986年度調査のその２、Ⅳ－２区が1987年度調査のその３である[2]。更に、1986年度には近木川より北西約400ｍの地

点で試掘調査を実施した。今回のその４の調査区はⅢ区の南隣接地にあたる部分である。

これまでの調査では、製塩土器・蛸壺・土錘などの古墳時代の漁撈具の他、旧石器時代から近世に至る各種の遺物が出土した。また、古墳時代・中世の柱穴群の他、各時代の自然流路等の遺構が検出され、海浜部の旧地形の復元と各時代の変遷を明らかにした。

①遺物について

今回の調査では、縄文時代から近現代までの遺物が出土した。これらの中で最も中心になるのは古墳時代であった。特に後期に出土量が集中し、７世紀代の遺物も見られた、これまでの調査で古墳時代前期が主流を占めていることと様相を異にした。

弥生時代～古墳時代前期の遺物は第５・６－Ⅰ層で主として出土した。古墳時代前期の遺物は壺・甕・高杯・蛸壺・製塩土器などが出土しているが、遺物の主体は蛸壺であった。蛸壺以外は細片が多く完形品はない。蛸壺は真蛸壺と飯蛸壺が見られた。真蛸壺は底部片で全体の形を窺い知ることができるものはなかった。飯蛸壺はⅢａ類かⅣａ類に属するもので、底部平底で外面タタキ調整したものや底部を穿孔したものも僅かに見られた。製塩土器は逆に非常に少量で、脚台Ⅰ式とⅡ式が出土している。

古墳時代後期は第４～６－Ⅰ層および各遺構から大量に出土している。須恵器の杯で外面底部のケズリが省略されたものや、土師器で竪穴住居址から飛鳥時代に比定できそうな杯身が出土している等、これまで余り見られなかった７世紀代の遺物が多く出土していることが注目される。

しかし、蛸壺や土錘等の漁撈具が大量に出土し、高い比率を示すなど、器種構成はこれまでの調査結果に近似していた。また、他の一般遺跡に比べ蛸壺・土錘など漁撈具の比率が非常に高いことは、やはりこの地点でも海浜集落の特徴を検証することができたといえるだろう。

この他、23－ＯＸで出土した須恵器甕内面のあて具痕に車輪文が見られた。これは前回、Ⅲ区の91－ＯＲで検出されているもので、前回のものと形状も酷似している。車輪文は６世紀後半の須恵器甕に多くみられ最近類例が増加しつつある。

奈良時代以降は出土点数も限られ、図示出来たものは少量であった。これまでの調査でも出土しているが、今回も布目瓦を含む瓦片が何点か出土している。

②遺構について

これまでの調査では、集落や生産遺構の検出がなく、遺跡の本体部分は別地点に存在すると考えられた。特に古墳時代の集落や生産遺構など、遺跡本体部分の調査が待たれていた。また、その１の第Ⅲ区では旧河道の91－ＯＲの肩から調査区外南方向に砂堆が堆積し、周囲より高い地形となるだろうと予想された。このことからこの調査区の南隣接地に脇浜遺跡の本体部分がある可能性がいわれていた。

そして、調査の結果、今回の調査地は、前述の91－ＯＲから南へ向かって続く砂堆上に立地することが確認できた。この砂堆に堆積した黄色砂を基盤層として、竪穴住居址２棟・炉跡１基の他、土壙・柱穴・溝など多数の遺構を検出し、前回の調査に予測通りの結果を得ることができた。各遺構の時期は竪穴住居址・土壙・溝などが古墳時代後期、柱穴及び一部の土壙が奈良時代～平安時代であった。残念ながら、古墳時代前期の遺構は検出されなかった。しかし、少量であるが前期の遺物も出土しており、隣接地に遺構が検出される可能性は残されていると言えるだろう。

竪穴住居址２棟は作り付けの竈を持つものであった。また、26－ＯＤで移動式の竈片が出土しており注目される。竪穴住居址に竈を持つ例は付近では畠中遺跡[3]（貝塚市）や二俣池北遺跡[4]（岸和田市）山直北遺跡[5]（岸和田市）三田遺跡[6]（岸和田市）でも検出されている。畠中遺跡のものは６世紀後半代で、明確なものは４棟に作り付けの竈が検出された。竪穴住居址の規模が大きい物ほど竈の規模も大きくなる傾向が見られ、５－ＯＤでは移動式の竈と甑が出土し、脇浜遺跡と同様の出土傾向を持っている。二俣池北遺跡のものは６世紀前半から７世紀初頭のもので、検出された10棟の竪穴住居址の殆どに作り付けの竈が見られた。山直北遺跡のものは古墳時代後期のもので、検出された４棟すべてに作り付けの竈が構築されていた。三田遺跡でも６世紀前半の竪穴住居址に作り付けの竈を持つものが検出されている。

しかし、今回の脇浜遺跡のものは他の洪積段丘上のこれらの検出例と異なり、崩れやすい海岸の砂丘上に構築したもので、竈はわざわざ粘土を運んできて構築しているという珍しい例であった。また、周溝や柱穴は検出出来なかったものの、住居址から出土した遺物はほぼ全器種が揃っており、一般の住居址と変わりはない。一年中かある季節的に限られるかは不明であるが、少なくとも一定期間ここで生活したことが窺える。

③微地形について

今回の調査地点は、前述のように海岸に程近い段丘崖の下に立地する箇所である。近世以前には海岸線に隣接した場所であったことがⅣ－Ⅰ区・Ⅳ－Ⅱ区の調査結果からわかっている。この地点は砂堆（浜堤）の上に立地しているが、ここは縄文海進以後形成されたと考えられ、砂堆上には弥生時代後期頃から人々が入った痕跡が今回の調査でとらえられた。特に古墳時代後期は集落（恒常的かどうかは不明）も形成されており土地利用が進んだことが窺える。古墳時代当時は砂堆部分は他の地点より隆起した地形となっていた。そして周囲は北側は河道で区切られ、東側は湿地帯ないし旧の河川あるいは流路が流れていたと思われ、砂堆周辺は安定した土地ではなかったようである。従って、段丘崖より下で生活する場所としてはこの砂堆上がもっとも適地であったと思われる。その周辺、例えばその１のⅢ区では、海岸の湾入した地形であったため製塩を行ったり、船を停泊させるなど集落の生産に関わる場所であったと思われる。以後、平安時代までは柱穴の検出などから集落であった可能性があり、中世には耕作地となったようである。

砂堆の形成過程を追求するため、最終段階でＴ．Ｐ．－1.0ｍまで部分的ではあるが深掘を行った。この結果前回までの調査同様、淡緑色の粘質混礫層（基盤層）を検出している。しかし、その上層の縄文海進時に堆積したとする砂礫からなる層（1986年報告第９層）は検出されなかった。また、この深掘りでは黄色砂とした第６－Ⅰ層より下層では遺物の出土は全くなかった。検出された基盤層は、その１のⅢ区でも同レベルで検出された。砂堆は基盤層の地形に関係なく堆積したものであることがわかった。今回の調査では限られた部分の深掘りであったため基盤層を掘削して調査することはできなかった。

④脇浜遺跡について

以上のことから、脇浜遺跡の調査で、砂堆上には集落を形成し、周辺部を生活環境として利用していたことが確認できた。そして、海岸に近く、蛸壺などの漁撈具を大量に使用していることから海に深く関わった集落であることが判った。

大阪府下で、海岸付近の段丘面より海側で調査が行われ、弥生時代・古墳時代での顕著な成果の得られたものは数少ない。弥生時代では、浜寺諏訪森遺跡（前期～中期）・浜寺黄金山遺跡（前期～後期）・春木八幡山遺跡（前期～後期）・沢新出遺跡（前期）があり、浜寺黄金山遺跡では、墓域が見つかっている。また、湊遺跡（庄内式期）では製塩土器、羽衣砂丘遺跡（後期）では蛸壺型土器など、後期以降になると製塩土器や漁撈具が出土す

るようになる。古墳時代では、羽衣砂丘遺跡（前期～後期）・伽羅橋遺跡（後期）・沢共同墓地遺跡（前期～中期）・小島東遺跡（前期～後期）がある。いずれも、製塩土器・蛸壺型土器・土錘など漁撈具の出土が特徴としてあげられる。しかし、泉州では未だ脇浜遺跡のように竪穴住居址が検出され、砂堆の上に集落址を確認した調査例はなかった。しかし、他の地域では深江北町遺跡[7]（兵庫県神戸市東灘区）・広江浜遺跡[8]（岡山県倉敷市福田町）などのように海岸近くの砂堆上や砂浜に立地した集落や遺構群の検出された例も各地で増加しつつある。泉州でも今後砂堆上に集落が検出される類例が増加するだろう。

この集落の人々が、漁撈具（蛸壺・土錘）の出土から漁業に携わったことは既に述べた通りである。しかし、漁業のみに依存していたのか、農業と漁業を平行して行っていたのかについては尚慎重に考えなければならない。最近西摂の北青木遺跡[9]で弥生時代から水田耕作が砂堆後背の湿地帯で開始されたことは判っている。深江北町遺跡でも弥生時代から水田耕作をしていた可能性が指摘されるなど、海岸部での水田耕作が早く開始されたことが指摘されている。脇浜遺跡でも調査地点東側の湿地帯で水田が検出される可能性がないとはいえない。この問題については、湿地帯の調査が進んでから検討する必要があろう。

海に携わった人々が同時に水田耕作も行ったのかどうか今後大きな問題となろう。

註

(1) 前掲書「脇浜遺跡発掘調査報告書」による。

(2) 前掲書「脇浜遺跡II発掘調査報告書」による。

(3) (財)大阪府埋蔵文化財協会「三田遺跡発掘調査報告書」 1987

(4) (財)大阪府埋蔵文化財協会「山ノ内遺跡B地区・山直北遺跡発掘調査報告書」 1988

(5) (財)大阪府埋蔵文化財協会「二俣池北遺跡・上フジ遺跡発掘調査報告書」 1989

(6) (財)大阪府埋蔵文化財協会「畠中遺跡発掘調査報告書」 1986

(7) 兵庫県教育委員会「深江北町遺跡」 1987

(8) 倉敷市教育委員会「広江・浜遺跡」 1979

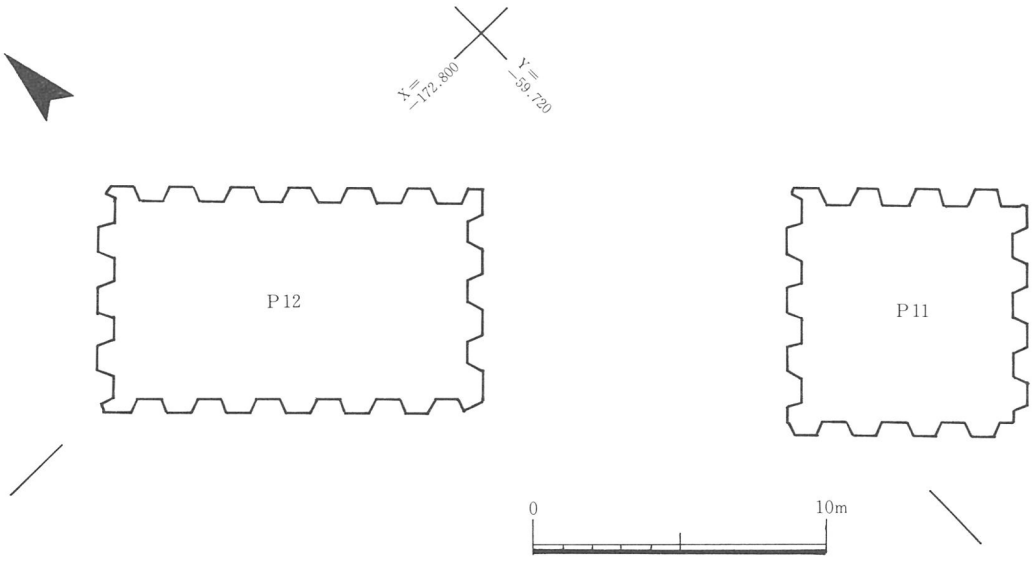
(9) (7)と同一文献による。

第Ⅳ章　1990年度１次調査の成果

第１節　調査の経緯

この発掘調査は、都市計画道路貝塚中央線建設に伴い実施したものである。同事業に対する脇浜遺跡の調査は、既に1985・86年度の両年に隣接部分について完了している。今回の調査地は、墓地移転、排水路の付け替え等の問題から1985・86年度に調査を実施することができなかった部分を対象とした。調査区直近のこれまでの成果については、既報告で近世の遺物を含む、斜行葉理の発達した砂礫層が陸地側から海側に向けて形成されていることが報告されている。さらに本貝塚中央線のすぐ西側の旧脇浜墓地の縁辺については、近木川河口部の北に形成された砂丘が認められ、第Ⅲ章に記されているようにその付近に古墳時代以降の脇浜遺跡の本体が位置することが推測されていた。本調査区はその砂丘部に取り付く微高地の北端部の裾に当たると考えられていた。こうした事情から今回の調査は、橋脚部分での層位的な観察に主眼において進めることを目的とした。

発掘調査にあたっては、掘削深度が地表下５ｍに及び、湧水等が予想されたため、鋼矢板で調査区を囲った後実施した。現地調査は1990年７月30日より同年９月６日まで実施し、調査面積は２ヶ所あわせて137㎡である。



第31図　調査区位置図

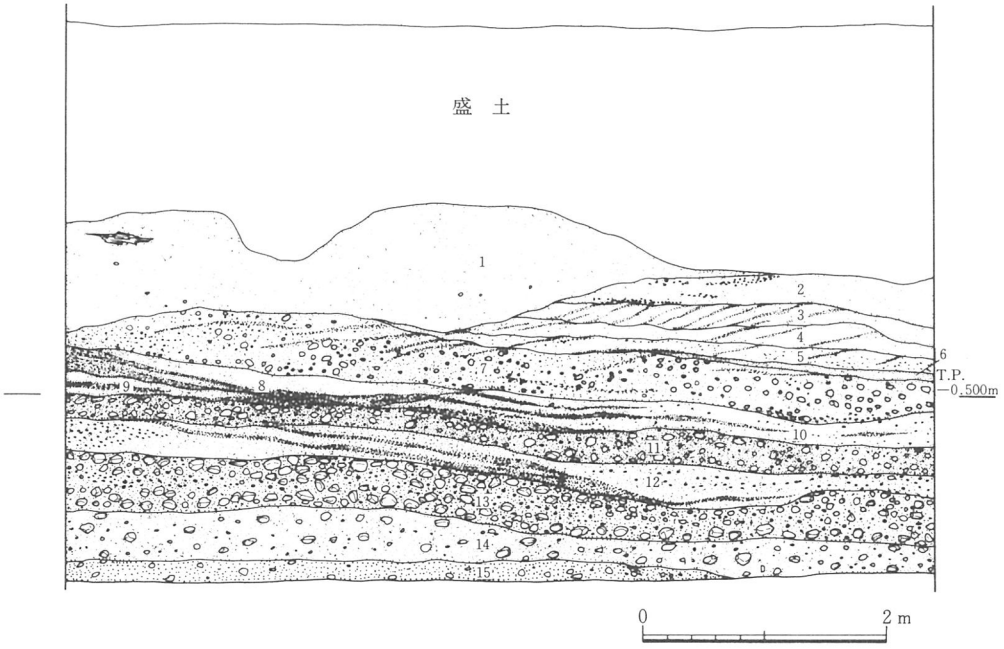
第２節　各地区の調査成果

Ｐ11調査区（第32図、図版17）

当調査区は、二つの橋脚の内山側に位置している。Ｐ11は中央部分より北側を既設の水路が横断しており、調査区の約半分は攪乱を受けていた。遺物は第１層中から出土したもの及び、旧水路に伴って出土したもののみで、それ以下の層からは全く出土を見なかった。

現表土より約1.4～2.0mは、現代の産業廃棄物等を多量に包含する盛土層である。この土層を取り除く過程で、北側の攪乱部分では、現水路に並行する旧水路跡が検出された。旧水路の護岸は、板材を杭によって固定したもので、その周辺には厚くヘドロが堆積していた。このヘドロ層内からは、近代以降の陶磁器・屋瓦など数多くの遺物が出土している。

第１層は、灰オリーブ色細砂層で、近・現代の陶磁器などが包含されていた。第２層以下は水成堆積層と考えられ、細砂層・粗砂層・砂礫層・礫層などが互層をなして堆積して



1. 5Y　4/2 灰オリーブ色細砂層
2. 2.5Y 5/4 黄灰色砂礫混細砂層
3. 10YR 6/4 にぶい黄橙色細砂層
4. 2.5Y 5/4 黄褐色粗砂層
5. 10YR 6/4 にぶい黄褐色細砂層
6. 7.5Y 5/1 灰色細砂層
7. 10YR 4/1 灰色砂礫混砂質土層
8. 10Y　4/1 灰色粗砂層
9. 7.5Y 6/1 灰色細砂層
10. 5Y　6/2 灰オリーブ色細砂層
11. 7.5Y 5/2 灰オリーブ色礫混細砂層
12. 7.5Y 5/2 灰オリーブ色砂礫層
13. 7.5Y 7/2 灰白色細砂層
14. 2.5Y 6/6 明黄褐色細砂層
15. 10GY 6/1 緑灰色粗砂層

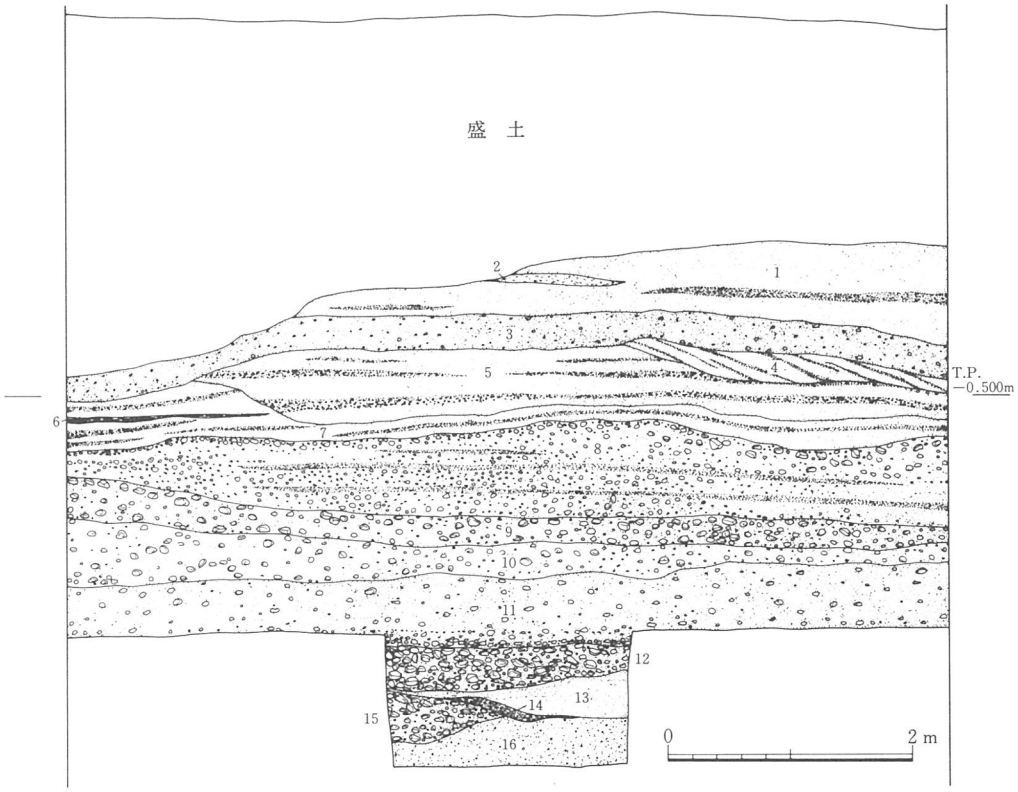
第32図　Ｐ11南壁土層断面図

いる。第３～５層にかけては、顕著な葉理を観察することが出来る。第15層より下は、非常に堅く締まっている。

Ｐ12調査区（第33図、図版18）

現表土より約2.0～3.0mは、現代の産業廃棄物を多量に包含する盛土層である。この盛土層中には、隣接する脇浜墓地のものと考えられる墓石が14個埋め込まれていた。いずれも台座の部分で、和泉砂岩製のものと花崗岩製のものの二者が認められる。

第１層は灰白色細砂層で、近・現代の陶磁器・土師質土器・木桶などが包含されていた。第３層以下は水成層で、細砂層・粗砂層・砂礫層・礫層などが互層をなして堆積している。第10層以下は非常に堅く締まっており、Ｐ11調査区の第15層に対応するものと思われる。第10層中には貝殻の混入を認めることが出来たが、保存状態が極めて悪く、その種類など



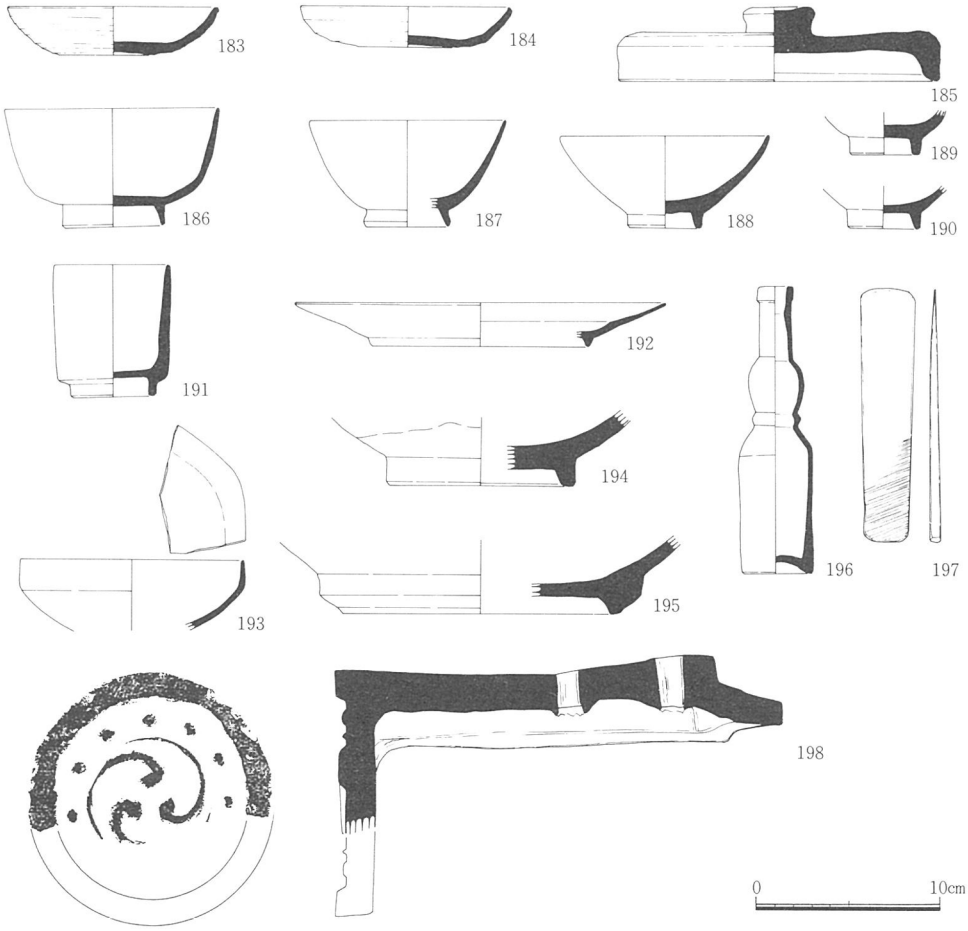
1. 2.5Y 8/2 灰白色細砂層
2. 5Y 7/1 灰白色細砂層
3. 2.5Y 6/3 にぶい黄色砂礫層
4. 2.5Y 7/2 灰黄色細砂層
5. 10YR 6/3 にぶい黄橙色粗砂層
6. 10GY 4/1 暗緑灰色シルト層
7. 7.5Y 6/2 灰オリーブ粗砂層
8. 7.5GY5/1 緑灰色砂礫層
9. 10YR 5/1 黄褐色
＋5Y 5/2 灰オリーブ色細砂混礫層
10. 7.5Y 7/2 灰白色礫混砂層
11. 10GY 4/1 暗緑灰色砂質粘土層
12. 5G 6/1 緑灰色砂礫層
13. 10G 5/1 緑灰細砂層
14. 5G 6/1 緑灰砂礫混粘質土層
15. 5G 6/1 緑灰砂礫層
16. 10G 5/1 緑灰色砂層

第33図　Ｐ12東壁土層断面図

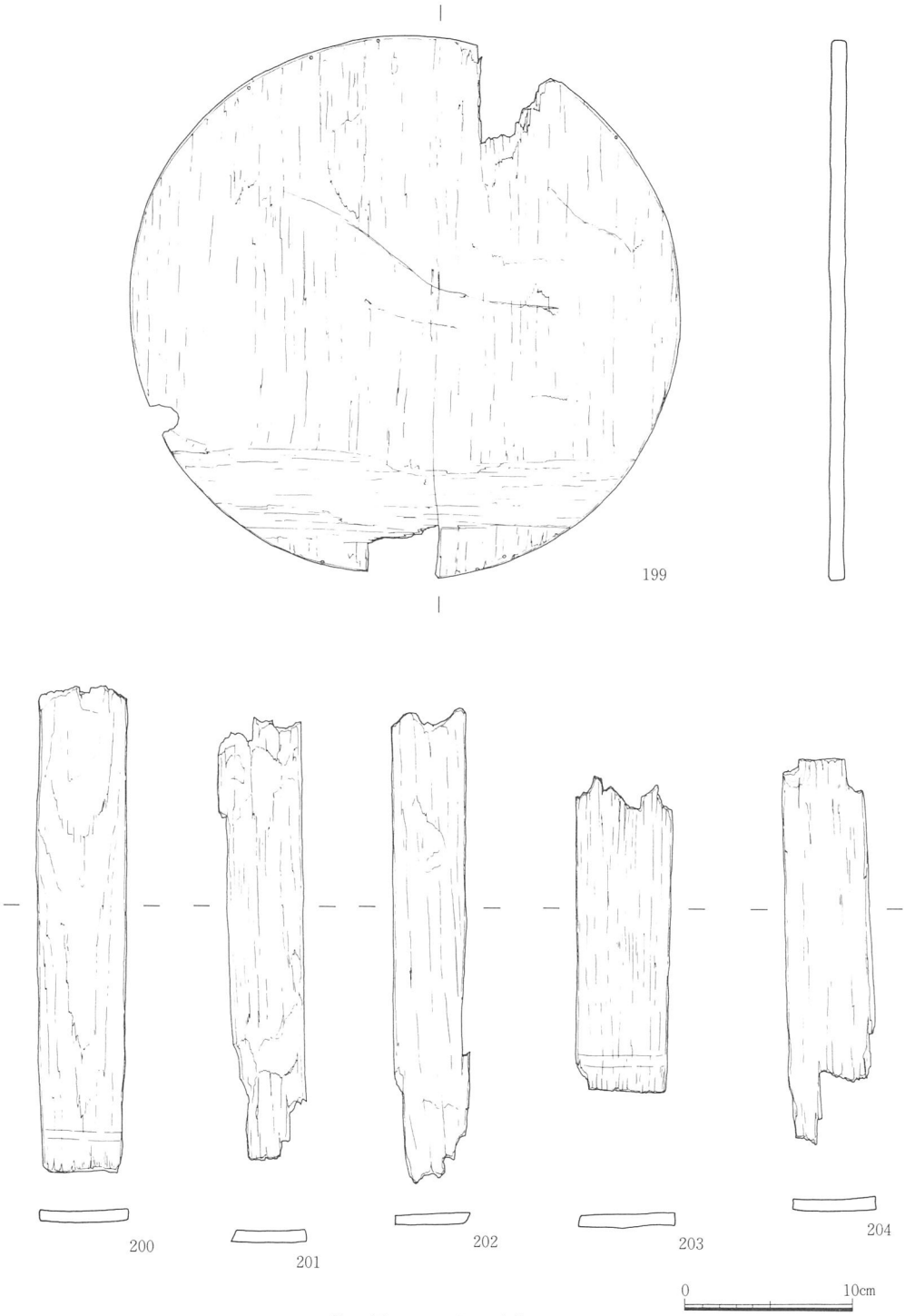
を特定することは出来なかった。遺物の出土は、第１層からのみで、第３層以下からは一点の遺物も出土しなかった。

第３節　出土遺物　（第34～36図、図版19～21）

各調査区から出土した遺物は、土師質土器・陶器・磁器・ガラス器・瓦・木製品があり、Ｐ11からは犬の遺体が見つかっている。183～185は土師質土器である。183は口径11.4㎝、器高2.6㎝、184は口径11.5㎝、器高2.2㎝を計測する皿で、ヨコナデにより調整した後、外面下半から底部を回転ヘラケズリによって仕上げている。185は平坦な天井部に大きなつまみを付した蓋で、恐らく骨壷等の蓋になるものと思われる。186～193は磁器である。



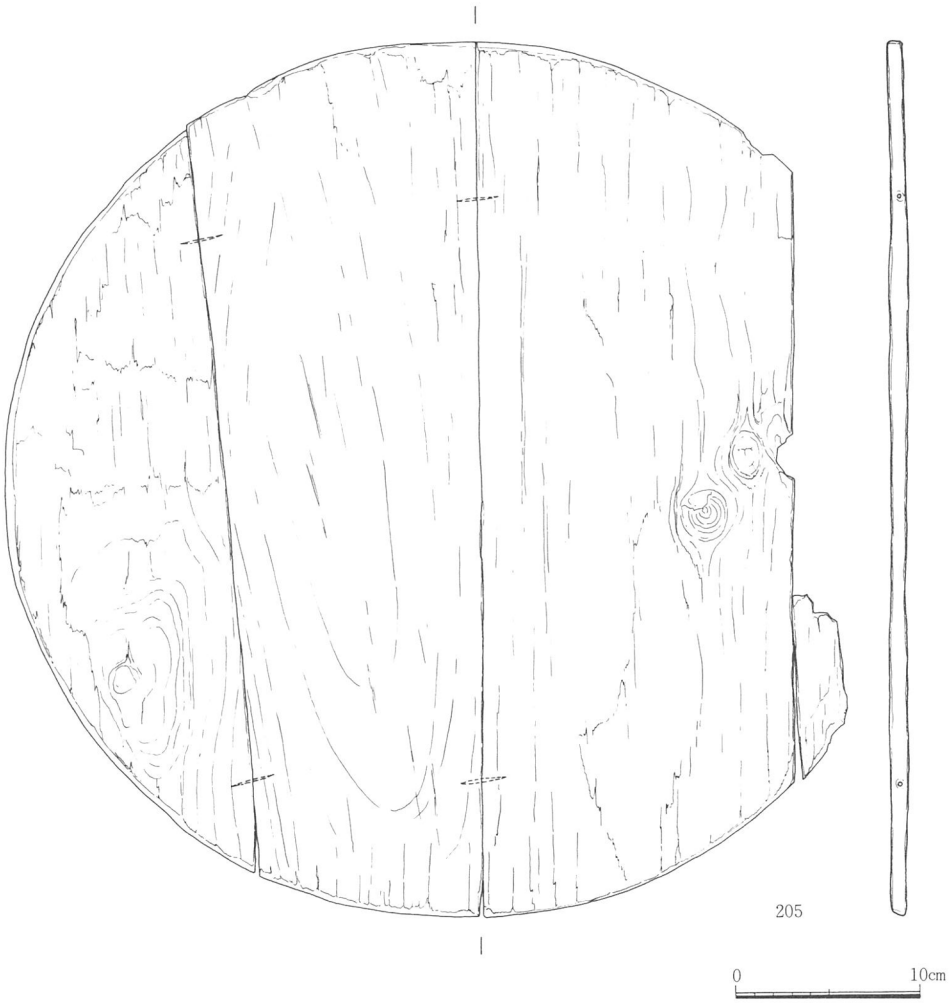
第34図　Ｐ11出土遺物（１）



第35図　Ｐ11出土遺物（２）

いずれも近代以降のものである。194・195は施釉陶器である。194は高台径10.0㎝を計る瀬戸・美濃系の鉢で、内面に目跡が観察される。また、畳付を磨滅させている。195は高台径14.0㎝を計る唐津系の刷毛目大鉢で、18世紀代のものである。196はガラス瓶で気泡が認められる。197は長さ13.5㎝の木製の箆である。198は屋瓦で瓦当径は13.4㎝、文様は三ッ巴である。

P11・12より各一点ずつ桶が出土している。P11出土のもの（199～204）は、直径33.0㎝、厚さ0.9㎝を測る桶底板である。内面には木目に直交する形で植物繊維の付着が認められる。側板は一部底板に接合した状態で出土したが、遺存状態は非常に悪い。側板は、



第36図　P12出土遺物

竹製のタガによってしめられていた。また、側板は底板との接合部分で、約5.0～6.0㎝の幅を有しており、恐らく18枚程度で全体を構成していたものと思われる。長さは残存する部分で29.0㎝ほどあり、それ以上の高さを有していたと考えられよう。

P12出土のもの（205）は、直径47.6㎝厚さ1.0㎝を計り、4枚の板材を組み合わせて作られている。各板材はそれぞれ2ヶ所ずつ竹釘を打ち込み結合させている。側板は全て失われており、底板のみ検出された。

第4節　小　結

今回の発掘調査で明らかとなった諸点について、簡単にまとめておきたい。

土層の堆積状況を観察すると、両調査区共に、砂・礫などが互層をなし、水成堆積物であることが判る。各層共に、遺物は全く包含されていなかった。また、P12の第10層中には貝殻の混入が認められ、いずれも自然堆積層であると考えられた。東側隣接地域でかつて実施された発掘調査では、砂堆部分で古墳時代以降の流路・掘立柱建物などが検出されているが、今回の調査区では、遺構は全く存在しない。おそらく汀線に近い部分に相当するものと思われる。また、堆積層は、北に向かって緩傾斜している様子を看取することが出来、細砂の堆積部分では顕著な葉理が認められた。これら自然堆積層の上部を覆うように、近・現代の遺物を包含する細砂層が認められた。P11では、この土層上面から、調査区内を横断するように走る旧水路の護岸施設が検出され、近代以降の陶器・磁器・瓦などが数多く出土している。また、南側に隣接している脇浜墓地に係わる遺物は、P12より墓石が14点、攪乱土層中より出土したのみで、遺構は存在しなかった。

以上の様に、今回の発掘調査では、脇浜遺跡が当該地域まではその範囲が延びないことが明らかとなった。

参考文献

(財)大阪府埋蔵文化財協会「脇浜遺跡発掘調査報告書」1986
(財)大阪府埋蔵文化財協会「脇浜遺跡II発掘調査報告書」1987

付節　脇浜遺跡出土のイヌについて

1．はじめに

ここに紹介する脇浜遺跡出土の犬骨は、明治時代～戦前ころの旧河川より出土したものである。近代のイヌについては従来あまり触れられることがなく、日本在来犬の歴史を考える上で、近代犬は空白期に相当する。よって、ここに脇浜犬の概要を報告することは、イヌの進化と系統を推し量る上に、一つの資料を提供してくれるものと考え、計測値を掲載して、今後の比較検討の基礎資料としたい。

2．概要と計測方法（図版22・23）

犬骨は、P11の調査区内で、明治時代～戦前までの遺物（戦後の遺物は含まない）を包含する旧河川の護岸内より、比較的まとまった状態で出土したものである。ある程度時期を特定できる良好な資料と言える。

出土部位は、イヌ頭蓋骨１・左下顎骨１・環椎（第１頸椎）１・左大腿骨１・右大腿骨１・左脛骨２・右脛骨１・右中足骨２・左寛骨２・右寛骨１・仙骨１で、最少個体数は２個体である（図版22・23）。

これらの部骨は、埋葬された状態で検出されたものではないので、同一個体のものと限定することは困難であるが、犬骨の残存状況やそれぞれの骨の大きさや加齢程度から推測して、大きく若成獣と幼若獣の標本に分けることができる。さらに骨自体の保存状況および関節の適合性から推して、図版22・23の１～11と12・13はそれぞれ同一個体のものとして差しつかえないと考えられる。前者を仮に脇浜１号犬、後者を脇浜２号犬と呼称しておきたい。

１号犬は頭蓋骨、左下顎骨、環椎、左右大腿骨、左右脛骨、左右寛骨、仙骨、右第４中足骨、右第５中足骨等の部位がある。２号犬は左寛骨、左脛骨の部位である。なお、これらの骨には解体された痕跡は確認されなかった。

計測方法については、斎藤（1963）に準拠し、計測値（単位㎜）を第１～４表に掲げている。その際、周辺では同時期の比較する資料の報告例が皆無であるため、時期は異なるが、参考資料として弥生時代のイヌである亀井１号犬、２号犬の計測値をあわせて表示している。ちなみに亀井１号犬は中型犬、２号犬は中小型犬のタイプにそれぞれ所属するものである。

（1号犬）

頭蓋骨最大長は上顎骨の大半を欠損しているため不明であるが、後述する下顎骨や四肢骨等の大きさからして、長谷部（1952）分類による大型犬に相当する。性別は陰茎骨の出土はみないものの、頭蓋骨の形質および寛骨（骨盤）の座骨弓の形状等から判断して、雄と考えられる。

頭蓋骨は、上顎骨を含めて吻端はすべて欠損している。また、右頬骨弓の側頭骨頬骨突起や右側頭骨頬骨突起の前方は欠損している。頭蓋上縁は曲線を描くものの外後頭隆起は後方によく突出している。前頭骨頬骨突起の突出度はやや弱い。

下顎骨は、左下顎骨のみ残存している。関節突起の一部をわずかに欠損しており、全長は151.95㎜＋αを計測する。咬筋窩はよく発達し、筋突起の筋稜はシャープである。にもかかわらず下顎枝は全体に薄く、下顎体はきゃしゃな感を与える。M_1後葉の下顎底はやや張っている。

切歯Ｉはすべて脱落し、前臼歯P_1は欠失、$P_2P_3P_4$は残植している。ただし前臼歯P_4は、先天的に歯牙の形態に変異が認められた。本来はP_2P_3と同様に、歯冠は多咬頭を呈するが、標本は単頭形を呈し、今までに報告例を見ないもので特筆に値する。おそらく歯牙の退化現象にともなう変異と考えられる。後臼歯M_2はやや小振りで、M_3は欠歯（先天的に欠如している可能性がある）している。家畜化が進んだ場合は、吻が短くなるにしたがってM_3の欠如率が高くなることが指摘されている。すなわち、M_3の萌出しない個体が増加する傾向にある。P_4の変異形態およびM_3の欠歯から、下顎骨の退化現象を指摘することができる。

四肢骨は、いずれも後肢骨のみであり、上腕骨等の前肢骨はまったく検出されていない。前肢骨や肋骨、椎骨等の部骨がないのは採取漏れであろう。骨端は、いずれも骨幹と融合し、骨端線は閉鎖している。大腿骨、脛骨はともに左右が揃っており、大腿骨は左側で全長193.5㎜、脛骨は全長197.2㎜をはかる。

以上の諸特徴をもつ脇浜１号犬の体高は、山内（1958）の体高推定式Ⅲによれば、四肢骨の長さから、約51㎝を計測する。この数値を現在の日本犬に当てはめれば、ほぼ四国犬の雄の標準体高の大きさに相当する。

（2号犬）

残存骨の加齢程度からみて、明らかに１号犬とは別個体のものである。骨端は遊離して

おり、骨結合する以前の個体と考えられる。したがって、生後６ヶ月未満の個体と判断される。性別は不明である。

３．まとめ

脇浜遺跡出土のイヌは、雄と考えられる若成獣の１号犬と、性別不明の若幼獣の２号犬の２個体分である。脇浜１号犬は長谷部（1952）分類の大型犬の範疇に入るもので、日本犬であれば、四国犬の大きさに相当する。いままでに報告された古代犬には見られない大きさの犬である。

脇浜１号犬の形態的な由来は、比較資料が僅少なため明らかでないが、共伴する遺物が明治～戦前頃と考えられているので、外国犬（洋犬）の可能性も充分に考えられる。近代犬はいまだ資料不足であるため、今回は簡単な概要と計測値を掲載するにとどめ、今後の類例を待ってさらに検討していきたい。

参考文献

長谷部言人（1952）「犬骨」『吉胡貝塚』　文化財保護委員会
山内忠平　（1958）「犬における骨長より体高の推定」
斎藤弘吉　（1963）「犬科骨格計測法」
大野淳一　（1980）『犬－その銘柄』　カラーブックス　3
茂原信生　（1989）「古代日本犬の形態変化」　考古学ジャーナル　303

第１表　頭蓋骨の計測値一覧（単位㎜）

計測項目及び計測点		脇浜１号犬	亀井１号犬	亀井２号犬
頭骨最大長	Ｉ－Pr		175.0	164.2
頭骨最大長	Ba－Pr		158.5	146.0
基底全長	Pr－？		168.0±	154.0
頬骨弓幅	Zy－Zy		103.0	93.0
脳頭蓋長	Ｉ－N		98.0	89.5
頭頂骨長（矢状縫合上における）	L－Br			16.8
前頭骨頂	Br－N		31.8	34.7
頭蓋幅（1）	Eu－Eu	58.95	48.0	52.5
頭蓋幅（2）	Au－Au	67.9	58.7	56.8
頭蓋高（矢状櫛を含む）	Br－Ho		51.5	47.5
バジオン・ブレグマ高	Ba－Br		61.7	55.0
最小前頭幅	Fs－Fs	42.1	32.2	31.9
前頭骨頬骨突起端距離	Ect－Ect	60.65	48.6	44.2
後頭三角幅	Ot－Ot		60.0±	59.6
後頭三角高（後頭孔上縁より）	Ｉ－O	27.2	29.0	27.6
大後頭孔長	Ｂ－O			
大後頭孔幅		20.6	16.8	16.7
最小眼窩間幅	Ent－Ent		30.8	27.0
顔長	Pr－N		83.4	80.5
吻長	Pr－Oo		74.0	70.9
最小吻幅	（Ｐ１～Ｐ１の部分で）		32.4	31.5
吻幅	（犬歯歯槽外縁における）		34.4	33.0
吻高	（Ｎより硬口蓋まで）		40.0	40.0
鼻骨長	N－Rh		63.0	61.7
鼻孔最大幅			20.5	21.1
硬口蓋最大長	Pr－St		83.1	79.8
硬口蓋長	Ｉ－St		80.8	76.4
上臼歯列長	（P1前縁線よりM2後縁まで）		59.3	57.0
P^4長		19.5	17.1	17.1
P^4幅		11.45	8.2	8.9
M^1長		13.95	10.8	11.9
M^1幅			12.3	13.5
M^1+M^2			16.4	16.4

第２表　下顎骨の計測値一覧（単位㎜）

計測項目及び計測点		脇浜１号犬	亀井１号犬	亀井２号犬
下顎骨全長Ⅰ	Goc－Id		128.4	123.2
下顎骨全長Ⅱ	Cm－Id	151.45＋α	128.1	121.8
下顎骨全長Ⅲ	Cm－犬歯後縁	136.2	113.8	105.9
下顎体長	M_3後縁－Id	98.75＋α	85.1	84.9
下顎枝長	Cm－M_3	52.95	42.1	36.6
下顎枝高Ⅰ	Gov－Cr	60.05	51.6	46.8
下顎枝高Ⅱ	Gov－筋突起後端		44.5	40.6
顆　　高	Gov－関節突起上面	31.4	24.9	23.9
下顎枝幅		43.25	35.4	32.1
筋肉突起幅（下顎切痕－下顎枝前縁下部）		41.2	29.9	26.9
関節顆長（関節突起内外端の長さ）			23.1	20.7
下顎体高Ⅰ（M_3の後縁にて）			24.6	24.6
下顎体高Ⅲ（M_1の中央にて）		24.8	23.3	22.5
下顎体高Ⅳ（M_1・P_4の間）		24.15	22.6	21.0
下顎体高Ⅴ（P_4の中央にて）		22.5	21.5	21.9
下顎体高Ⅵ（P_2・P_3の間）		21.2	19.0	17.8
門歯縁高				
下顎体厚Ⅰ（M_1下方における）		11.6	12.4	11.0
下臼歯列長（P_1前縁－M_3後縁）		75.85	67.4	63.7
下前臼歯列全長（P_1前縁－P_4後縁）		37.9	37.9	33.4
下後臼歯列全長（M_1前縁－M_3後縁）		35.6	30.9	31.1
M_1長（M_1歯冠前後最大長）		24.3	18.3	20.2
M_1前幅（前歯根部歯冠内外縁間長）		8.3	7.8	8.6
M_1後幅（後歯根部歯冠内外縁間長）		7.9	7.4	7.7
C（犬歯頸最大長）		11.65	8.3	
C（犬歯幅径）		7.6	5.5	
C（犬歯冠高）		20.9	13.2	
C（犬歯歯根最大幅）		12.2	9.0	
C（犬歯歯根長）		26.8		
C（犬歯全長）		45.0	33.35	

第３表　頸椎骨および後肢骨の計測値一覧（単位㎜）

部位	計測項目及び計測点		脇浜１号犬（左）	亀井１号犬	亀井２号犬
環椎	全長	1－2	53.4		
	前関節突起間　全幅	4－4	46.35		
	後関節突起間　全幅	5－5	5.8		
	前（後）椎孔最大幅	8－8	17.0		
	前（後）椎孔　高径	10－11			
	椎頭横径	14－14	27.45		
	椎頭高径	10－15	14.0		
	椎窩横径	16－16			
大腿骨	全長	1－2	193.5	157.5	147.7
	上端最大横径	3－4	43.4	35.8	32.5
	転子窩直径	1－5			
	頭長	6－7	20.3	16.8	15.7
	頭幅	8－9			
	体中央横径	15－16	16.3	12.2	12.8＋
	体中央前後径	13－14			
	下端最大幅	17－18	34.2	27.9	26.1
	内側顆前後径	21－22			
	外顆前後径	23－24			
	膝蓋関節面　最大幅	22－24			
脛骨	全長	1－2	197.2	157.1	146.9
	顆間隆起幅	1－5			
	上端最大前後径	6－7	36.2	34.1	29.6
		7－10			
	上端最大横径	8－9	33.7	30.2	29.3
	体中央前後径	11－12	15.2	11.7	10.4
	体中央横径	13－14	14.3	13.0＋	11.7＋
	下端最大幅	15－16	26.0	20.3	19.1
	下端最大前後径	17－18	18.8	14.3	14.0

第4表　後肢骨の計測値一覧(単位㎜)

部位	計測項目及び計測点		脇浜1号犬	亀井1号犬	亀井2号犬
仙骨	全長	1－2	53.4		
	前関節突起間全幅	4－4	46.35		
	後関節突起間全幅	5－5	5.8		
	前(または後)椎孔最大幅	8－8	17.0		
	前(または後)椎孔高径	10－11			
	椎頭横径	14－14	27.45		
	椎頭高径	10－15	14.0		
	椎窩横径	16－16			
右第四中足骨	全長	1－2	82.15	62.1	58.9
	上端前後径	6－7	13.6	10.4	9.2
	中部横径	8－9	7.9	6.1	5.85
	下端横径	12－13	7.65	6.45	6.15
	下端前後径	14－15	9.05	7.75	6.2

第Ⅴ章　1990年度第２次調査の成果

第１節　調査の経過

1990年度第２次調査は、貝塚中央線建設にともなって、これに取り付く市道部分の拡幅整備の一環として行ったものである。遺跡の範囲確認調査は貝塚市教育委員会が担当し、その結果をもとに大阪府教育委員会の指示を受けて、本調査を当協会が実施することになったものである。今回調査を実施したのは、全長125ｍ、幅4.5ｍの約562.5㎡である。調査は平成２年12月18日から同３年２月20日まで行った。

調査の手順は先ず現水路のコンクリート壁の取り壊しを行い、それと並行し重機による掘削を実施した。重機による掘削はこれまでの周辺での調査成果を踏まえ、盛土、現耕作土層及び近世耕作土層の一部に対し実施した。そしてそれ以下の層を人力で掘削した。

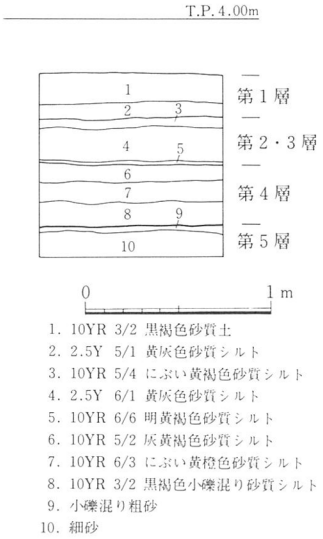
現水路の掘方埋土の掘削や後述する第２層掘削時に、現水路直下で溝状の遺構（02－ＯＳ）を部分的に検出した。しかし現水路の掘方が第２層途中にまで及び、遺構の検出が不明瞭であったため第３層上面において遺構の検出を行った。この際の遺構検出面を第１遺構面とした。また02－ＯＳ以外にも、調査区の直交方向に走行するとみられる溝や自然流路等の遺構も検出した。しかしこれらの遺構は、調査区の幅が狭く現水路や02－ＯＳにより分断されていることもあり、調査区の南壁断面における観察のみに終っている。

第１遺構面調査終了後、下層での遺構の存在が予測されたため、再び人力による掘削を全面において実施した。その結果砂層堆積の上面において、自然流路とみられる遺構を検出した。この際の遺構検出面を第２遺構面とし、この面の調査終了をもって今回の現地調査を完了した。

第２節　層　序

第１項　基本層序（第37図、図版25）

調査前の状況は、幅約２ｍの未舗装の里道とそれに平行する幅約1.5ｍの水路、そしてそれらの両側は畑地であった。標高はおよそＴ．Ｐ．＋2.6～3.8ｍを測り、西側から畦畔を境に順次レベルを下げている。



第37図　基本層序

今回の調査地は先にも記したように、1985年度調査のⅢ区に隣接していることから当時の層序をほぼ踏襲することができる。その概要は次の通りである。

第0層　現代の盛土層及び攪乱。

第1層　現代の耕作土層。

第2・3層　近世及び近代の遺物を包含する層。おもに3層からなる。床土とみられる層をともなうことから耕作土であったと考えられる。1985年度調査では近代の遺物を包含する層を第2層、近世の遺物を包含する層を第3層と記載されていたが今回の調査地では区別できなっかた。

第4層　中世の遺物を包含する層。おもに3層からなる。その違いはほとんどなく、若干、下層ほど砂礫を多く含む傾向がみられた。1985年度調査では6世紀から15世紀代にかけての遺物を包含するとされていた。しかしその取扱には苦慮のあとがみられ、層の形成を15世紀以前に求めることに対し慎重を期していた。今回の調査では検出した遺構との関係から、15世紀代もしくはそれ以降に形成されたものと考えたい。

第5層　今回の調査地における最下層である。基本的には細砂で形成されているが、砂粒の大きさや色調の違いにより区分される。上面から約5㎝の厚さにわたっては5㎜以下の角礫を多く含み、表層に10㎝以下の円礫を含む箇所もみられた。部分的に掘削を行ったが遺物は検出できなかった。1985年度調査における第9層に相当するものと考えられる。

第2項　包含層出土遺物（第38～40図、図版31・33・35）

今回の調査では古墳時代前期から近世に至る各時代の遺物を、包含層から検出することができた。しかしその量はコンテナ（55×35×14㎝）にして2箱と僅かであった。

206～209は製塩土器である。206は丸底を呈するタイプとみられるが、長時間の煮沸を受けた痕跡が認められず、小型丸底壺である可能性を残す207～209は、いずれも脚端径が5㎝未満で、脚底部が平底状のものと、上底状のものとがある。210～212は蛸壺形土器である。いずれもコップ形を呈する。以上のものは古墳時代前期に比定される。

213は須恵器提瓶である。破片のため全容は不明であるが、体部の両面はともにややまるみを帯びている。肩部外面には浅い沈線を1条巡らせ、把手は円形の浮文に変容してい